

疑問假名遣 前篇(學說の部)

あいおい(相生)

一 アヒオヒ

一 或人の説 あひおひとは、小松の生合也。昔の友と
思心なり。

(古今集序注經濟雜誌社本羣書類從第一〇輯の五四五頁)

二 契沖

『古今餘材抄』國文注釋全書本二六頁に、『あひおひは相生な

り。俗にも常にいふ事なり。『惠慶家集』に 屏風に子日の
所「二葉よりあひおひしても見てしがなけふ契りつる野べ
の小松に」『新古今』大貳三位「相生の小鹽の山の小松原
今よりちよのかげをまたなん」

あいおい(相生)

『和字正濫鈔』二の三に「相生。あひおひ。あひをひと
かくべからず。「あひおひの小鹽の山の小松原」などよめ
り。年の同じほどなるを、世にあひおひといふも、小松など
のたけをくらべて、ならび生たるによそへていへる歟」

此の他、行阿の『假名文字遣』二六橘 成員の『倭字古今

通例全書』また北畠親房の『古今集序註』續羣書類從卷四一

條兼良の『古今集童蒙抄』經濟雜誌社本羣書類從第一〇輯の五七一頁 飛鳥井雅親

の『古今榮雅抄』序末の二丁 北村季吟の『八代集抄』活版本上巻、古今集の

二五 香川景樹の『古今和歌集正義』活版本一尾崎雅嘉の

『古今和歌集兩序鄙言』下の一八丁 中村秋香の『古今集詳解』

二七 ちよび石川雅望の『雅言集覽』近藤眞琴の『こと

ばのその』大槻文彦の『言海』いづれも相生説なり。

三 或人の説

あいおいとは相逐なり。たがひにおひすがひなるやうにとなり。

(古今餘材抄 國文注釋全書本二六頁)

本居宣長も『古今集遠鏡』全集第五の六五〇頁に 『あいおいひは、

今の俗語にもいふことにて、相追なり。そはもと、たがひに追み追はれみする意より、出たる言にて、いくばくの前後もなく、大かた同じほどなることをいへり」と

いへり。さて石原正明の『年々隨筆』百家説林續下の一の二六二頁に 『高

砂すみの江の松もあいおいのやうにおぼえ』編者いふ、古今和歌集

序文中のとは、老後の述懐なり。相おひとはもろ心に

おもふをあいおいといふ相にて、もろともに生出た

る意。俗にいふおない年なり。これ本居先生の説な

り。此先生は、古學者とななる眞淵の流にて、延約相通をむねとして、詞をとかるる中に、かうおだやかなる説

の出来るは、めづらかにめでたし』と記し、『増補雅

言集覽』にも、中島廣足これを引けり。これによれば、

宣長の説は相生なり。然れども、宣長の著書には、此の

説未だ見當らず。おもふに、正明かつて宣長に師事せ

しことあれば、其の際聞きおけるにて、宣長も初は相生

説なりしにや。附記して疑を存す。

文部省編輯寮の『語彙』の説また相追の義とし、マ

ケズオトラズ」の意なりと注せり。

四 物集高見

『日本大辭林』に 『あいおい 相追 た

がひにおひあひて、まけずおとらず、おなじほどにてある

をいふ。『古今』序「たかさごすみの江の松もあいおいの

やうにおぼえ』

また『同書』に 『あいおい 相生 おなじとき、もろ

ともにおひいづるをいふ。『夫木』九「いかばかりふるかは

野邊にとしもへぬいつあいおいのふたものまつ』

落合直文(ことばの泉)の説またおなじ。

二 アヒオイ

荷田春満

賀茂真淵の賛同

松も相おいと云は、右の高砂

の二首

編者いふ、古今和歌集の雑の部に「たれをかも知る人にせん高砂の松も昔の友ならなくに」かくしつ世をやつくさん高砂の尾上にた

ある松ならなくに」とも、松と我と相ともに老たる心。住の江

ある歌をさせるなり」とも、松と我と相ともに老たるてふ意に讀たれ

しものを」とあるも、松と我と相ともに老たるてふ意に讀たれ

ば、それをもて書り。

さて「限りなく我老はてて後、男ざかりの昔をおもひ出

て、若く盛なりつるも、只時の間にかく老たることを、くね

くしく悔なげかるる時にも、歌をよみて、其なげさを和さ

むる」と云り。

編者いふ、「さて限りなく我老はてて後」とあるより以下

の文は、「高砂住の江の松も云々」とある古今集序文の句

につづきて、「男山の昔を思ひ出て、女郎花の一時をくねるにも、

あひあい(相生)

人の注に、上の言どもには、皆かの歌編者いふ、古今和歌集中

て云しに、此相おいを、相生と思ひ誤りしかば、引べき歌も、

おくに無ままに、さまざま作り言をいへり。相生の心とし

ては、文もつづかず、何のことはりもなく、相老とする時は、

上とひとしく歌もひかれ、理も明らかけて、文もいと面白さ

也。

是は荷田東まろの考出せしことにて、世にめでたくこそ。

(古今集序表考賀茂真淵全集第一の八四四頁)

山岡俊明の『類聚名物考』第六冊の二七五頁に『高砂住吉の松

相老之事。『古今和歌集』序。此こと後世の思ひ誤りに

て、かなもたがへり。相生と心得しはアヒオヒの假名

にて、それはなにとも心わきまへがたし。相老にてこ

そあれ。アイオイと假名も書べし。すなはち作者貫之

ぬしの家集にも、徴とすべき歌有り。猶たにもいとあ

ほし」とて、『紀貫之家集』「人のごとちとせゆくまは高

砂の松と我とやけふをくらさん」「たれをかもしる人にせん高砂の松もむかしの友ならなくに」○『紀貫

之集』二「いたづらに老にけるかな高砂のまつやわが

よのはてをかたらん」○『同』九。『拾遺集』「い

たづらに世にふるものと高砂のまつも我をや友と見る

らん」○『金槐集』下。寄竹祝「あひひの袖のふ

れにし宿の竹よらばへにけり我友として」○『續千

載集』秋下。西園寺入道前太政大臣「住吉の松も我身

も古にけりあはれとおもへ秋のよの月」○『夫木抄』

四。『行家卿住吉歌合』松閒花。民部卿爲家。「神垣の

松の木の間の白ゆふや春にあひひの櫻なるらん」等

の歌をあげたり。又『同書』同頁に、「古今序考。相

老」と題して、かの序文の意を、「かぎりなく、我老は

てて後、男ざかりのむかしを思ひ出るに、若く盛なりつ

るも、ただ時の間に、かく老たる事を、くねくしく悔

なげかるる時にも、歌をよみてその歎をなくさむるなり」と解せり。

村田春海も『若桂』^{二八}に春満の説を賛して曰く、

『古今』の序を相老と解たるは、荷田東万侶のいひ出た

る説にて、さならでは聞えぬ詞也。編者いふ、相老説は既に

けるを見契沖は相老といふ義なることを考得ずして、舊

説のままに、相生の義としてとけり。さるによりて『正

濫鈔』に「相生 あひひ」といだして、「あひひの

小鹽の山の小松原」といふ歌を引たり。此「小鹽の山

の小松原」とよみしも相老の義なるべきか。又は、後

の世の歌なれば『古今』の序にいへるを相生の義也と、

誤り心得てよめるにてもあるべし。といへり。され

ど『増補古言梯標註』を見れば、春海云と記して、「あ

ひひは相追なり。『惠慶集』子日「二葉よりあひひ

ひひしても見てしがなけふ契りつる野べの小松と」とあ

り。此の説は當時いまだ上梓せざりし、本居宣長の『遠鏡』の説を見て記せるものなり。其の故は、春海が宣長に贈れる書狀本居豊穎藏に「遠鏡も濱田侯の御本を傳を以拜借仕候而半分程拜見仕候さてくめづらしき御説ども欣躍仕候事に御坐候序中相おひの詞のこと惠慶法師家集に、子日の所といふ題にて、「ふた葉よりあひおひしても見てしがなけふちぎりつる野べの小松と」此歌のあひおひ、全相追の義と見え申候益御説のたしかなる事を奉感服候」とあるを以て明なり。さて『古言梯』に春海が標註を書きしは、寛政七年四月にして、『若桂』の成りしは、翌年のやうなれば、後に相老の説に従へるものなるべし。

なほ相老の説によれるもの、楫取魚彦(古言梯) 春登(假字音便撮要) 萩原廣道(心の種)等あり。

あひおひ(相生)

三 アヒオヒ・アヒオイ

一 了譽 アヒヲヒとは相生也。或は又相老也。始終の替にして意は同なり。何も昔の友と云意也。ひさしき意なり。

(古今序註卷六の一丁)

二 谷川士清

『倭訓栞』あひおひの條に「あひおひ。『古今』の序に「高砂住吉の松も相おひのやうにおぼえ」といへるは相老の義也といへり」

『同書』あひおひの條に「あひおひ 相生の義也。「相おひの小鹽の山の小松原」などよめり。○相生の松、武藏多摩郡宮本村にあり。雌松・雄松ども、高さ七間餘也」

加茂季鷹(正誤かな遣) 『俚言集覽』の移山案 岡吉胤(假字遣提要)等また相老・相生併用の説なり。

また源 岩垣は『類語假名格』に『古今集』の序文なるは、相老の意、『惠慶集』なるは相追の意なりとい

へり。

参考

香川景樹の『古今和歌集正義』活版本一の五九頁に「あひおひとい

ふ詞は、はやくより有つらめど、物に見えたるは、此序編者の

今集の序なり。始め也。また『拾遺集』に、安法々師「天降るあら

人神の相生を思へば久し住吉の松」なほ上に擧げたる惠

慶・三位等の歌編者いふ、前にあげたる「契沖の

松」は老たる例によめる古歌につきていへり。げに今も同

じ年ごろに生出たらん人を、相生といふも古言の遺れる也。

舊説に「あひおひとは相逐也。互に追すがひなるやう

にと也」といへるを『遠鏡』に主張していへるは非也。相逐

の意は、齡の上ならでもいはるる方あり。又古歌の意にも皆

違へり。古來の相おひ、理りもたらひておだやかなるべし。

春満は、是を相老の意として、假字をも改めたるは、猶非

也。互に老たるを、あひおひといへる事、昔より例もな

く、又「相おひのやうにおぼえ」とは、相おひにはあらぬ

物を、しかおぼゆといふ也。今は松も我も老たれば、まこと

に相老なるに、「やうにおぼえ」といひて叶ふべけんや、

思ふべし。こは己が老たる心より、非情の松の老たるをも

昔の友になぞらへられて、同じ齡のほどにやと、ふとは思

ひなさるるわりなき感哀をいへり」といへり。

あいだちなし

一 アイダチナシ

一 三條實澄

『岷江入楚』國文注釋全書本、下の二〇三頁、「あいだちな

き物に」の註に「開書「愛のなきなり」とあるは、愛の字

音とせるが如し。

二 松浦 黙

俗、恩愛の心なきを、愛立なしと云なり。

『尚書』伊訓に 立_レ愛惟親。立_レ敬惟長。始_ニ于家邦_一終_ニ于四海。愛敬の立こと、家よりはじまりて、如此ほどこしゆくときは、四海皆同胞なり。不仁にして、愛相なきを、愛立のなきと云こと、ゆへなきにあらず『源氏』螢に「愛立なき御ことども」

(齊東俗談卷六の一〇丁)

貝原好古が『諺草』

卷六の八丁に説くところ全く同じ。

谷川士清も『倭訓栞』に「あいだてなし『源氏物

語』に「あいだちなさ事」と見えたり。

編者いふ、湖月抄本螢の卷一四丁

にあ_リ。愛立無の義成べし。『書經』に 立_レ愛惟親 と

いへり。愛に溺れて、理にさかるを、かくはいふ成べし』

といへり。

此の他、橘 成員の『倭字古今通例全書』にも「あ

あいだちなし

いだちなし無風流。又無愛達とも』と註し、

『俚言集覽』の愚案にも「是は愛相らしきといふ事

也。今は不相應事を云』といひ、『本朝俚諺』にアヒ

ダテナシとあるを、假字ちがひなるべしといへり。

岡本保孝の『言靈』一の三にも「あいだち だちは

まめだちなどのダチにて詞也。「アイソノナイ」と云

こと』と注せり。

二 アヒダチナシ

文部省編輯寮

『語彙』

三の二

に「あひだちなさあい

だちなさと同意。

アヒダテナキ

間隔無の意

編者いふ、此の説は眞淵の「一説なり。下に擧げたり。『同書』

一の三に「あいだちなさ

アヒダテナ

間隔なきの義にて、分別なきことな

り。アイは音便』

大槻文彦の『言海』落合直文の『ことばの泉』また

『語彙』の説に同じ。

石川雅望(雅言集覽) 物集高見(日本大辭林)は、語

源を、間隔無と説きながら、音便假名のアイダチナシを

のみ舉げて、アヒダチナシを舉げざるは、いかなる故な

らん。但し、雅望は、源注餘滴(國書刊行會本三一五頁)には「此詞い

氏物語新釋(五五六三頁)の説を引きたり。

三 アイダチナシ・アヒダチナシ

賀茂眞淵

『源氏物語新釋』全集第五卷の五〇六一頁に「あひだ

ちなさ 間隔なきてふ意也。此前後の文どもに依にも、互

の御心に隔もおさ給はず心やすきさまをいへり」

『同書』同卷夕霧の卷に「あいだちなさものに だちはあい

だつといふに同じく愛敬だつさまなさといふなるべし」

あいだる

一 アイダル

長慶天皇

『仙源抄』に「あいだれ 愛垂。きつと

もなき躰。なよびたる心」と見えたり。

谷川士清(倭訓栞) 萩原廣道(源氏物語々釋九丁)

も「愛垂の義にや」といひ、文部省編輯寮の『語彙』

大槻文彦の『言海』等にも、アイを愛の音とせり。

二 アヒダル

大石千引

『言元梯』に「アヒダル 彌舌垂」

あいなし

一 アイナシ

一 素寂 『紫明抄』内閣本、天の六丁に「あいなう 無愛也」と

注せり。

行阿の『假名文字遣』三三丁にも「あいなし 無愛」と注し。

と注し。

清水濱臣も『語林類葉』に「あいなく 愛無の意

ときこゆ。『枕冊子』三二「梨の花中あいなさやうちく

れたる人の顔などみては、たとひにいふも、げにその色

よりして、あいなく見ゆるを」といひ。

此の他、『源氏物語』の古き注釋書をはじめ、宗碩藻

鹽草二〇丁橘 成員倭字古今通例全書谷川土清倭

訓栞萩原廣道源氏物語々釋三一丁いづれも無愛の義

とせり。

又岡本保孝は『難波江』百家説林續編下 一の六〇九頁に「古書に假

字の證となるべき事はなし。しばらく縣居翁の説にし

たがひて、アイウエオのイの假字とするなり。愛の音

あいなし

になさんも心ゆかねど、『枕冊子』などは、愛無の意に

てよく聞ゆるなり」とて、前に出でたる、梨の花の事

をいへる文を引き、「此詞の譯、ナンデモナイ・センモナ

イ・メアテノナイなどといふ俗言にあててよろしと、先

師清水濱臣いはれたり」といひ、「此詞、いづれもみな、

よろしからぬことに用ふるに、又よきことに用ふるも

有る也」とて、『榮華物語』煙後に「齋院、をととみこう

み奉らせ給へれば、あいなくよの人よろこび申す」と

あるを例に引きたり。

二 本居宣長 『玉の小櫛』全集第五の 一二四九頁に「あいなく 此

詞數もなく、多く有り。そをことごとく見わたし合せてか

むがふるに、何といふわさまへもなしに、うちつけに物する

ことなり。……注に無愛なりあぢさなくなりなどいへる、

皆かなはず」といひ、また

『同書』同卷の一 三七二頁に、「あいなくいみじといへば編者いふ、湖月抄本源氏物

語夕霧の卷、三六丁に見えたる句なり。あいなくはあへなくなるべし』といへり。

あへなくは敢無なるべければ、宣長は、あいなくの語を二

義に解し、さて假名遣は、いづれの場合もいとせるなり

辻善成の河海抄(國文注釋全書本二〇五頁)に「いとあひなし無愛・無敢。隨所可用之」とあり。但し無敢の意なる場合における氏が假名遣、いなるか

ヒなるか今知りがたし。

石川雅望、『源注餘滴』國書刊行會本、七頁・四二頁に、宣長の説を引

きて、アイナクとせり。雅言集覽にもイの假名遣とせり。

萩原廣道は『源氏物語々釋』一の三頁に、宣長の説をあげ

て、『何といふことなしに、打つけにものするも、や

がて愛のなき意なれば、いたく違へるにはあらず』と

いへり。

三 香川景樹 あいなくは飽無なり。『源氏物語』など

に多し。俗にカギリナキと云が如し。アキのキ文字イとな

るは、「キサキノ宮」を「キサイノ宮」・「カキツケテ」を

「カイツケテ」と云に同じ。

(東塙亭塾中間書桂園遺稿下卷の四〇五頁)

四 清水光房

『難波江』百家説林續編下、一の六一〇頁に「友人清水光房は、ワア横通。無ワキ分別ワキなり。音便キをいと云ふ常也。ア

に通ひて、アイナクなりといふ』とあり。

岡本保孝、これを駁して、『同書』に「常にワキナシ

と云ふことあらば、さもいはん。ワキナシと云ふ詞、常

談にもあらぬ上に、又横通して、アキナシ・アイナシと

せん事、並にかたし』といへり。

二 アヒナシ

鈴木 脰の『雅語譯解』に「あひなしナンノラチモナイコトヂヤ あひ

なく云々ナニトナウムサト・ナソノハリ合モノク』と記し大石千引は『言元梯』に

「阿比那久アヘナク 味无アヘナク』と注せり。

三 アイナシ・アヒナシ

一 文部省編輯寮

『語彙』に『あいなき』 分別もなき

意。又うちつけなる意なり。間なきの音便』 『あひなき』

間無の意。音便に、アヒナキともいふ。うちつけなる意』

と注し。更に、

『あいなき』 「オモシロミノナキ」又「カハユゲノナキ」を

いふなり。『今昔物語』一「家毎に行て物を乞ひ食ふ事あ

り。慥く无愛なり』と注せり。

此の説は、長慶天皇の『仙源抄』に『あいなう

無愛・無間、心別歟』と注し給へるによれるか。

大槻文彦(言海) 物集高見(日本大辭林) 落合直文

(ことばの泉)等また アイナシ(無愛) アヒナシ(無

間) アイナシ(アヒナシの音便)とせり。

二 山岡俊明

あいなき 無愛『河海抄』 この詞は愛を音

語にいひて、後世のことばなり。あへなきに似て、その意

大にことなり。無敢をもあへなきといひ、轉りては、あひな

あいなし

きといふは、あへてする事無にて事たがへり。これはうつ

くしむべき愛敬のなくて、やや憎む意ある詞なり。……○

『源氏物語』桐壺 「人のそしりをもえはばからせ給はず、

世のためしにもなりぬべき御もてなしなり。上達部うへ人

なども、あいななくめをそばめつつ、いとまばゆき人の御覺え

なり」○『徒然草』七上、「世にかたり傳ふる事は、まことはあ

いなさにや。多は皆そらごとなり。……」

(類聚名物考第四冊の三〇五頁)

あへなき・無敢『河海』 あひなき。無愛をあいなきといふ

には、その意異なり。されば、はかなきといふも、似たる詞

にて、物のもろくてあきたらぬをいふ。俗に無飽氣アツケナキなどい

ふに同じ。○『源氏物語』桐壺 「御むねのみつとふたが

りて、つゆまどろまれず、あかしかねさせ給ふ。御使のゆき

かふ程もなきを、いぶせさを、かぎりなくの給はせつるを、

夜中うち過る程になん、絶はて給ひぬるとてなきさわげば、

御つかひもいとあへなくてかへり参りぬ」 ○『徒然草』

上、五 四段 「御室にいみじき兒の有りけるを、いかでさそひ出し

てあそばんとたくむ法師ども有りて云々。法師ども詞なく

て、聞てにくく、いさかひ腹立て、歸りにけり。餘りに興あ

らんとする事は必あひなさまものなり」 ○『蜻蛉日記』三上、

「わが心ちのさはやかにもならねば、つくづくとふして、思

ひあつむることぞあひなさままでおほかるを、かき出したれ

ば、いと見苦しけれど」

(同書同冊の三〇六頁)

三 賀茂真淵

『源氏物語新釋』全集第五の四四三頁に『あひなく

『ちちくぼ物語』に「此あいさやうなし」と云に依て、愛

敬無を略きたる語なり」

『同書』同卷の四に五九〇頁に『あひなさ』コラ凝へ無の意なり。愛敬無

の意なるは、アイナクと書、凝無の時は、アヒナクと書べし。

アイは愛の音なり。アヒはアへにてこらへさへぎる所なき

なり」

四 未定

『俚言集覽』の愚案に『あひなく』假名未考。…愚案

愛ナキの字音ならばアイの假字也」

あいなだのみ

一 アイナダノミ

一 谷川士清 『あいなだのみ』『源氏』にみゆ。あぢさな

きこと也といへり。無愛頼ミの義成るべし。諺にも、若ヤ

ダノミ・マダモ頼ミともいふ事あり。

(倭訓栞)

はやく牡丹花宵柏の『弄花抄』卷一の二六丁に『あひなだ

のみ かひなきたのみといふ心也。あぢきなき心也。
又無愛云々」といへることあり。

二 萩原廣道

『源氏物語々釋』一の九丁に「あいなだのみ

敢無憑アヘナダノミといふ言の訛ナマれる也。敢アヘなしは俗にハリアヒナシといふ意也。さていかならんともしりがたきゆく末の事を憑みにするは、はりあひなき事なる故に、アヘナ頼ミと云也」といへり。同氏著の心の種には、「あひなだのみ案に無敢憑の轉にや。頼氏は物語々釋は心の種より後の著述と思はるるを以て、語釋の説を探りたり。」

大槻文彦の『言海』は、此の説を探れるなるべし。

「あいなだのみ 敢無頼ミの轉かと云」と注せり。

此の他、本居宣長の『玉の小櫛』全集第五の一二八頁岡本保孝の

『難波江』百家説林續編下 一の六〇九頁文部省編輯寮の『語彙』いづれ

もイの假名遣なり。

二 アヒナダノミ

あいなだのみ

一 山岡俊明

あひなだのみ 相憑ミ

(類聚名物考第四冊の三二二頁)

二 石川雅望

あいなだのみ 甲斐なきたのみなり。山

のあひをかひと云ふに同じ言のはたらきなるべし。さらばアヒナダノミなり。

(雅言集覽)

本居宣長は『玉の小櫛』全集第五の一二八頁に此の語の意義を

解して、「すべて此詞は、いかにあらんもしりがたき行末の事を、そのわきまへもなく頼みに思ふことなり」といひ、『弄花抄』『細流抄』等に「かひなき頼み」とあるをたがへりとせり。

さて『弄花抄』などに、「かひなき頼み」といへるは、單に語釋なるか。或は雅望の如き意見なるか明らかに知りがたし。

三 落合直文

『ことばの泉』に「あいなだのみ 無間ミ

頼[●] あいなさたのみ。頼みがひなさたのみ。あてにならぬ
たのみ。そらだのみ』とあり。

あひなだのみとは見えざれど、アイナシの語を、『あひ
なし』無間[●]「あいなし 無間。あひなしの音便』と注せ
るより推せば、あひなだのみをおとせる事明にして、あいな
だのみはその音便假名なりといふべきなり。

此の他、鈴木 脰の『雅語譯解』に「あひな頼み
アテニモナラヌ心アテ』とあり。近藤真琴も『ことは
のその』にヒの假名遣とせり。

三 アヒナダノミ・アイナダノミ

賀茂真淵

『源氏物語新釋』

全集第五の
四五〇五頁

にあいなだの

めと書して、無愛[●]の意とし、更に

『同書』同卷の四に
八二九頁に

「あひなだのみ

遮^ア

無だのみにて、末に

いまだ待むかふ物の無を云なり』といへり。猶あいなし

の條なる氏の説を參照すべし。

あえかに

一 アエカニ

契沖

「平安 あゑか。『和名抄』淡路津名郡郷名。

『源氏』にあゑかといへる詞も同じぎ歟。』と『和字正濫

鈔』四の一に記し、

『河社』五の三

八丁にも

『和名鈔』云、淡路國津名郡平安^{阿惠。}

これによるに『源氏物語』にあゑかといへるも、おだひか
なるころなれば、此平安の字なるべし』といへり。^{源注拾}

せる所、ま
た同じ。

伊勢貞丈の『安齋隨筆』

帝國圖書館本
一〇の四丁

にも、

『古き物

語の冊子に、あゑかと云詞あり。平安の二字をアエカ

と訓也』とて『和名抄』を引き、『アヘカと書はかなづかひ違へり』と記し、

本居宣長も、『玉の小櫛』

全集第五の一三〇六頁

に『源注拾遺』の

説を引きて、淡路國の郷名平安アエカと、もとは一つ言なるべしとてエの假名を書き、加茂季鷹（正誤かなづかひ）も『和名抄』平安の訓によれり。

萩原廣道の『源氏物語語釋』

一の二〇丁

には、『源注拾遺』

の平安、『源氏物語新釋』の危氣の説を斥け、『さる意にはあらず。『雅語譯解』に「いとわかくて物はかなくよわき意也」と解けるごとく心得てあるべし。また假字はしばらく平安の阿惠加アエカにしたがへり』といへり。
語釋より前に成りしと思はるゝ心の種には、「あへか、微弱」とあり。

二 アエカニ

賀茂眞淵

『源氏物語新釋』

全集第五の四五―四頁に

『あえか

あやうけといふ詞なり。をさなきものを、あえかといふも、あやうけといふ詞なり。それを轉用して、はかなきことにもいへり』

『同書』

同卷の四五二頁

に

『あえかに

此語の本は、アエはヤフ

の反ユなればユエ二廻通じて、アヤフをアエといふ。カはあやしげといふに同じく、ケとカと通へり。さてヤイエエヨの音なれば、かなもアエと書べし』

『同書』

同卷の四五八六頁

に

『あえかはあやうげなるをつづめた

る語なり。或人『和名』に、淡路國津名郡平安阿惠加と有を以ていふはわろし。國郡郷の字は、奈良朝にて佳字に改められし時、その本意に違へるぞ多き。泥むべからず。弱浦ワカを明光浦とせられしが如し。然れば此阿惠加に、平安の字を用ひられしも、本意とはしがたし。又惠の假字も意得がたし』

村田春海も『假名拾要』に

『あえか

物語文に多

くみえたり。『狭衣』の今本にあえか[○]と有を、古本には、あやふけ[○]と書る所あり。さればアヤフケをつづめて、アエカといへるにて、エの假字成べし。キョラをつづめて、ケウラといへる類なり。物語の詞にかゝる類ひいと多し。アヤ・アエ・アユは常に通ふ詞なり。ヤフの反はユとなるを、エといへるならむ。さてケとカも通はしいへるなむ』といひ、

石川雅望(源注餘滴

契云として源氏物語新釋の説を擧げたるは誤なり)

中島廣足

(増補雅言集覽) 敷田年治(音韻啓蒙

下の四丁

大槻文彦

(言海) 落合直文(詞の泉)等も危氣^{アヤフケ}の説によれり。

行阿の『假名文字遣』

丁一六

文部省編輯寮の『語彙』

物集高見の『日本大辭林』またエの假名遣とせり。

三 アヘカニ

一 谷川士清

あへか『源氏』に見ゆ。弱き意也といへ

り編者いふ、八雲御抄に「うつくしく、ひわづによはき躰也」とあるによれるか、淡[○]と語意通へり。

(倭訓栞)

二 寺田長興

あへか あはれけ也。ハレの約へ也カは

ケに通ひて、氣の義也。

(太津可豆衛)

此の他、橋 成員の『倭字古今通例全書』にも「あへかなり『源氏巴註』に云、淡き心とぞ」と記し、鈴木 脰の『雅語譯解』またへの假名遣とせり。

あえしろう(會釋)

一 アヘシラフ

賀茂眞淵

あへしらひ『日本紀』に待の字を訓せ

り。語の本は饗をアへといひ侍るより出て、皆人をもてな

す方の話となりぬ。こゝもしかり。

(源氏物語新釋全集第五の四五〇〇頁)

谷川士清も『倭訓栞』に『あへしらふ』『源氏物語』

に見えたり。饗の義。シラフは知也。ラフ反ル也。今

アシラフともいへり。『徒然草』に見ゆ。或は會釋を

譯す。『遊仙窟』に應答をよめり』といひ、

萩原廣道も『源氏物語評釋』國文注釋全書 本五九一頁に、真淵の

説をあげ、更に『同書』四五 八頁に『あへしらはん』諸本

あひしらはんと有しを今改めつ。誤れることしるけれ

ば也』といへり。また

『俚言集覽』に『あひしらひ』アヘシラフと云は雅

言也。又アシラフとも云。アへのかた正なるべし。：

・愚按、『遊仙窟』會をアヘシラへとよめり。又饗を

よめり』といひ、

佐藤誠實の『語學指南』三の二丁に『アヒシラフ』應答。

あえしろう(會釋)

アヘシラフが季世に至りて轉じたるなり』とあり

本居春庭の『詞の八衢』全集二 六頁にもアヘシラフの假

名遣とせり。

二 アヘシラフ・アヒシラフ

大槻文彦

あへしらふ

合へ觸ふ義。

(一) 挨拶す。應

答。(二) 程好く他の相手をなす。：。接待。(三) 添へて趣を

作る。取合はす。

あひしらふ。あへしらふに同じ。

(言海)

石川雅望の『雅言集覽』にもあへしらひ あひしら

ひの兩條にあげ、あへしらひの方には『蜻蛉日記』『源

氏物語』桐壺廿八、帚木 十四、橋姫廿の例および『日本紀』なる待、『遊

仙窟』なる會。應答等の例をあげ、あひしらひの方に

は『源氏物語』濡標十九、わか紫四 十四、末摘花廿七、『狭衣』二の下廿一、『空穗

物語』樓の上、下の十七の例をあげたり。

此の他、橘 成員の『倭字古今通例全書』文部省編輯寮の『語彙』物集高見の『日本大辭林』落合直文の『ことばの泉』にもアヘシラフ アヒシラフを併用せり。

あおい(葵) おうご(枅)

あおいの假名は、『倭名類聚抄』に阿布比、『古今和歌集』物名に、「かくばかりあふひのまれになる人はいかゞつらしとおもはざるべき」葵をかくして、逢ふ日とよめり。などあるによればフの假名遣なり。

おうごの假名も『倭名類聚抄』に阿布古『古今和歌集』俳諧に「人こふることを重荷とになひもてあふご

なきこそわびしかりけれ」枅を逢ふ期にかけてよめり。などあるによればフの假名遣なり。

然るに『天治本新撰字鏡』七の三に葵を阿保比『同書』七の一に枅を阿保己と訓せるによればホの假名遣なり。かく古書に二様の訓あるにつきて、學者の説は、ホフ、いづれも誤にあらずといふに、ほと一致せり。

一 楫取魚彦 『古言梯』に「あふひ 草也『字鏡』阿保比 『古今集物名』逢日アフヒに添。『和名抄』阿布比。布保通ず」

『同書』に「あふこ 物を荷ニナふ木也。『古今集』逢期アフゴに添。『字鏡』阿保古。『和名抄』阿布古。布保通」と注せり。なほおうす(命)の條なる同氏の説を参照すべし。

二 谷川士清 『倭訓栞』に「あふひ 葵をいふ。『倭名抄』にみゆ。『説文』に「葵傾葉向日」といへり。仰ぐ日の義なり。
編者いふ、はやく、貝原篤信の日本釋名(三の九丁)に「葵。あふはあふぐなり。ひは日也。日をあふぐ也。

葵は日にむかふものなり」と注し、和字正濫鈔にも「日に隨ひて傾く草なれば仰日アフレの意に名づくる歟」と見え、又新井白石の東雅（卷一三、穀蔬の部）にも、「葵。アフレとは、日を仰ぐをいふなり。猶説『新撰字鏡』には文に、黄葵常傾葉向日といふが如し」といへり。『新撰字鏡』には葵をアホヒとよみ、蔚をカラホヒとよめり。『枕草紙』にからあふひと見えたり」

『同書』に「あふこ 『倭名抄』に枋をよめり。杖名也と注せり。『新撰字鏡』にはアホコと訓せり。あげ梓の義なるべし。歌に多く逢期によせたり。アとオとかよふ例あり。負木オフコの義にや。今の俗オゴといへり」
（存採叢書本二〇の一九丁）に「相木の意にて通ずべし」といへり。編者いふ、喜多村信節は、嬉遊笑覽

三 伴 信友 あふこ 信按、アホ・アホ、古く通用する
例、此あふこあほこ次のあふひあほひなほあり。
（増補語林倭訓栞）

四 狩谷望之 『倭名抄』に「葵 本草云葵。音達。阿布比」とあるを、『箋注倭名類聚抄』九の四に注して「○：『新撰字鏡』云。葵阿保比。按阿布比阿保比一聲之轉耳」

あおい（葵） ちうご（枋）

といへり。また、『倭名抄』に

「枋 聲類云枋。音力。阿布古」とあるを『同書』六の七に注して、「○：阿布古。見『空物語』吹上下卷國讓上卷及『伊勢物語』後撰集』歌。按『新撰字鏡』枋訓阿保己一聲之轉」といへり。

五 鹿持雅澄

あほひ 『和名抄』に「本草云葵味甘寒無

毒者也。和名阿布比」 『字鏡』に「葵・荅、同、阿保比」

『和名本草』に「蜀葵、和名加良阿布比」とあり。阿保比と

も阿布比とも、もとより通し云るなるべし。枋をも『和名抄』には阿布古とあるを『字鏡』には阿保己とある如し。

……名の義はこの花、天ソラの方に向て咲ば、阿保は仰アホぐ意、比ヒは其貌を云言なるべし。
比の言は日のよしにはあらず。若し日を仰ぐよしならば、ひあふといはては叶はざるを

や。比ヒは忍シヌびなどの比ヒなるべし。さて設テて然シするときは仰アホぎ・仰アホぐと云。自然シるときは、仰アホひ・仰アホふと云しにぞあらむ。

凌シヌギシヌヒ・忍シヌも、もと同言にて、設テて然シするときは、志シヌ奴シヌ岐シヌ・志シヌ奴シヌ具シヌ

といひ、自然るときは、志奴比・志奴布と云と同例とすべし。

漢土にても、向日葵と稱ひ釋名に「葵葉傾日」といへるも、日に向ふを云といへり。但しそれらは、いはゆる冬葵のことなりとぞ。

(萬葉集品物解活版本三丁)

市岡猛彦の『雅言假字格』文部省編輯寮の『語彙』

大槻文彦の『言海』物集高見の『日本大辭林』落合直

文の『詞の泉』等いづれも、あおいをアフヒ・アホヒ

様に記せり。

然るにおうごにつきては『大辭林』『詞の泉』を除

く外はいづれもアフゴの語のみありてアホゴの語見當

らざるは、たまく漏れたるにか。或は理由ありて除

きたるにか。明ならず。

以上擧ぐるが如く、一般の學説は、ホフ相通じていづれ

も誤れるにはあらずといふに、ほゞ定めり。

然るに、義門の『指出廻磯』^{一四}の頭註に「阿保比・阿保

己なども、かの『萬葉』に匍豆を波保豆とかき、^{編者いふ、卷二〇の二三丁}

上總國天羽郡上丁文部鳥の歌に、「美知乃倍乃宇萬良能字
禮爾波保麻米乃可良麻流伎美乎波可禮加由加牟」とあり。給フを他麻保

とかける <sup>編者いふ、卷二〇の三一丁、下野國印波郡文部直大歳の歌に「志保
不尼乃弊古祖志良奈美爾波志久母於不世他麻保加於母波弊奈久爾</sup>

とあり。と、同く、保字はフの音にてかけるもの歟。久字をクに

もコにも用ゐるけん類にてとも思はる」といひ、

敷田年治は保にフ音のあるものと定めて、『假名沿革』の

序説中、古書どもに見ゆる假名遣の誤れるものを擧げたる

條に、「又假名遣のやうに見えてしからざるは、『新撰字

鏡』「葵・荅、阿保比」「枋、阿保己」の類なり。是は

保にフの古音あれば、保とよむべし。『萬葉集』二十に

「波保麻米乃」「新撰字鏡」に「幘、比太比乃加々保利」

などの如し」 <sup>編者いふ、普通フといへるを保と書ける例、なほ天治本新
撰字鏡(七の一五丁)に「棧」を萬太保利とあり。又日本書</sup>

紀、神代卷下に頭槌を訓して、筒歩豆智とあるを、應永本日本書紀私記に

は、加保豆知とあり。これらは猶、マタボリ・カボツチと訓みしか明ならざ

れど、東鑑(卷の一五)建久六年三月十日の條に「阿保五郎・阿保六郎」とあ

るは、保をフとよめる例證なるべきか 太平記鈔音義(國文注釋全書本二八三
頁)にも阿保をアフと訓とあり。さらばアホヒ・アホゴとかくは
誤となりぬべし。

あづく(預)

アヅク

一 楫取魚彦 『古言梯』に「あづく。當附也。預」

谷川士清も『倭訓栞』に「充附アテの義なるべし」と

いひ、大槻文彦の『言海』にも「當て付くアテの意か」とあり。

二 大石千引 『言元梯』に「彌着アツク」の義とせり。

あたい(價)

一 アタヒ

あづく(預) あたい(價)

一 松永貞徳 價 あたひ。あたは當るか。ひはつぐのひか。

(和句解四の三六丁)

貝原篤信の『日本釋名』三の五にも、「あたひアタルは當なり。あたひ千金など云も、千金にあたる也」といひ、新井白石も、『白石子筆語』上の二に「アタヒは當ルアタルの義と見え候」といへり。

二 契沖 價 あたひ。あたる・あたふ・あたはず皆一類也。

(和字正濫鈔二の三六丁)

三 楫取魚彦 あたひ 當易也。豆加の約多也。價。

(古言梯)

谷川士清(倭訓栞) 春登(假字音便撮要) 鹿持雅澄
(萬葉集古義活版本卷三上の六七丁) 大槻文彦(言海)いづれも『古言梯』の説におなじ。

此の他、石川雅望の『雅言集覽』には、『顯宗紀』に「不^{アタヒモテカハ}以^レ直^レ買^ル」『類聚名義抄』賈直の訓に、アタヒとあるなどを引き、文部省編輯寮の『語彙』には、『關市令』に「不^レ得^ル座^{ナガラビ}召^ニ物^ヲ主^ナ乖^キ違^フ時^ヲ價^上」とあるをひきて、いづれもアタヒの假名遣とせり。

なほ加納諸平の説あり。下に擧ぐる黒川春村の説の中に見ゆ。又平田篤胤・細井貞雄の説あり。あたえ(直)の條を参照すべし。

二 アタへ

黒川春村

此語の古く見ゆるは、『萬葉集』卷三に

「價^{アタヒナキタカラトイフトモ}無^ク寶^ヲ跡^ヲ言^フ十^ノ方^ニ云^フ々^ト」と見えたるのみにて、いまだ眞字がさの明證なければ、此假字づかひおぼつかなし。按ふに安^ダ倍^ヘの假字なるにはあらぬか。其由はいかにといふに、價は物を易る料なれば、すなはち當^{アテ}なり。さればあたへはあ

ての延言にて、當^{アテガヒ}易^ヒにはあらじとぞおぼゆる。

與^{アタヘ}といふ語の意も、物の代りに差あつるなれば、其原は同語なるべし。但與^{アタヘ}は然する意の語、價をアタヒと呼ぶは然る詞にて、けぢめある如く聞えられたれば、猶アタヒならむともいふべきに似たれど、『説文解字』人新附に「價物直也」と見えたる直も亦アタへと訓べければ、價もアタへの假字といふべし。玉篇に「直準當也」増韻に「當直也」とあるをも見るべし。

猶『仁德天皇紀』四十年條に「於是阿^{コニ}俄^ニ能^ハ胡^ノ、乃獻^ニ已^ニ之私地^ニ請^レ免^レ死^ス。故納^ニ其地^ニ赦^ニ死罪^一。是以號^ニ其地^ニ曰^ニ玉代^ト」とあるも、「玉の當^{アテ}」の意、『新撰萬葉集』に「沓^{クツ}直^チ」とあるも編者いふ、新撰萬葉集卷上夏歌に、「郭公なきたつ夏の山邊には沓直いたさぬ人や住むらむ」とあり。「沓の當^{アテ}」なるべき事おもふべし。

此次に猶いはむに、姓の直は阿^ア多^タ倍^ベの假字なり。さるは、『古事記傳』卷七に、「直^{アタヘ}は『書紀』に阿^ア多^タ比^ヒ延^エと訓る所あると、『和名抄』和泉國和泉郡の郷名に、山直^{ヤマノアタヘ}とあると

をあはせて、阿多閉と訓べし。名義未考得ず」とあるに従ふべし。但此名義いまだ考へずと鈴屋翁のいはれたるは、『神武天皇紀』に「倭直部始祖也」『皇極紀』三年十一月に「長直」と有に依るか。猶直の姓は、數十所見ゆれど、アタヒエと旁假字をへしもの、此ほかにはある事なし。されば此アタヒエの^{アタヒエ}疑ふらくは衍字なるべし。これを衍字とみるときは、直の姓も興への義とみて、おろく名義も聞ゆることちす。

『姓氏録』右京皇別、佐伯直條に云、「天皇詔曰。宜汝爲君治之。即賜針間別佐伯直姓也。直者謂君也」などあるが如く、其土地を興へ給ふ義と聞えたるをおもふべし。かゝれば、價直も姓氏の直も、阿多倍の假字を治定ところをおぼゆれ。

かくおもひとりて、書試みたりしは、天保八年の夏の頃なりしを、其翌る年の二月ばかり、紀伊國人加納諸平の許より、ふりはへていひおこせけらく、

價の假字は、『伊呂波字類抄』に「價アタヒ直同」などみえ、今の『玉篇』にも、價をアタヒと訓るは、皆後世の誤かと云はむに、アタへの訛ならば、アタエとこそ云へけれ。アタヒ又今の俗にもアタイと云へば、訛とも定めがたし。……

さらばいかなる義と云はむに、『靈異記』訓釋に「債母乃、カヒ」と見え、『新撰字鏡』『持統紀』『類聚名義抄』『字鏡集』すべて同訓にて、「物の代カヒ」なり。かくて價は其物にあて遣す代カヒなれば、當代アテカヒなるを、テカ約りてアタヒといへるなるべし。かゝれば、物の代に興ふる物を云ふ名ところ覺ゆれ。

さて直も、かの『字類抄』にアタヒと見え、又姓に借用むたる方にては『書紀』に阿多比延とみえたれば、比延を約めて、阿多幣とも云べきさまながら、姓の直を正しく、阿多幣と書たるもの見當らず、東遊歌に「以者太之

大江^{ダエ} 『風俗歌』に 「奈加川^{ナカツダエ} 太衣^{タイ}」 など見えたれば、磐^{イハ}田直^{ダンアタエ}・中直^{ナカツダエ}なるが、アの省れたる詞とおぼしければ、姓の直は阿^ア太江^{タイ}と定むべし。

然るに、和泉國和泉郡の郷名に、山直を也未多倍とあるは、直を阿多倍と訓べき明證に似たれども、地名は和銅の制にて、文字を省きたる、はた、いとく異なる用格もあれば、此山直の地も、山の直部などの居なるより、郷名となれるにもあるべく、大和國十市郡を、止保知とよめる類にて、ふと見ては假名違へりとおぼしきも、猶文字の省きざまより、混らはしくなれるなめれば、一向には、據用ゑ難き事多かり。東遊・風俗等の歌も、唱ふかたにつきて訛れるも有べけれど、さすがに古書なれば猶證とすべき事多く、殊に磐田直・中直はともに、太衣・太江の假字にて、其磐田直云々の歌の下句に 「以者^{イハダナルヤダヘハ}太奈留也^{タイナルヤダヘハ}多部能者^{タベノシヤ}云々」とある、多部^{アタヘ}も直か^{アタヘ}と云はむに然らず。田部の事とおぼ

し。……

『新撰萬葉』にクツテを沓直と書るは直を代^テと同義に用ゐたるなるべし。上の件、『字類抄』の訓を證とし、『書紀』の訓、『東遊』『風俗』を傍證として、舊訓のアタヒとすべくや。『和名抄』の郷名のみを據として、他書をみながら捨つべくや。己れはアタヒに心よすべくおもへど、猶まどへるにやあらむ。見む人定めよ。以上加納氏説

と^ナしるしおこせぬ。……
其第一證としたる『色葉字類抄』こそ快からぬ。こは保元養和の間に編集の書にて、……假字づかひもや、錯れにたる後世のものなるをや。

さて其説に云、アタへの訛ならば、アタエとこそ云べけれ。アタヒ又今俗にもアタイといへば、訛とも定めがたし云々。此説ことわり協ひがたし。『萬葉集』卷十四に「須素能^{スソノ}宇知可比^{ウチカヒ}」とも「須蘇乃^{スソノ}宇知可倍^{ウチカヘ}」ともあるを見るべし。

猶卷十六に、佐比豆留サヒヅルとある。轉るを『新撰字鏡』には佐戸豆留サヘヅルとあり。上件の説の如くばウチカヒをウチカイとは訛るとも、ウチカへとは云べからず。サヒヅルをサイヅルとはいふとも、サヘヅルとはいはじとするにか。こは無下に僻案なるべし。かゝれば俗にアタイともいへば、アタヒにてアタへにはあらずとも決め難かるべし。

又云、『靈異記』訓釋に云々、『字鏡集』云々……此説も亦甘心しがたし。熟々債の字義を按ふに、こはその物を責ハダるかたに係れり。また價は代カりを興ふる方に係れり。かゝれば、自他の差別ありて、同義とは云がたかるべし。

又云、價は其物にあて遣カヒす代なれば云々。こは先達の舊説のまゝにて此を是とおもはむからは、これかれ論辨のさたにも及ばず。……

又云、姓の直を阿多幣と書たるもの見當らず云々。こは『古事記傳』の説に従ふべし。部は上古より、氏にのみあり

て、大伴部・服部などこそいへ。これを姓の下につけて、直部・村主部などいへる例は、さらにく見當らぬものをや。猶按ふに、『姓氏錄』和泉國未定雜姓に、山田造あると、河内國未定雜姓に、八俣部あるとを見あはせて稽ふるに、山直の也末多倍は、八俣部か山田部か、何れかの借字なるべし。かく見るときは、阿多倍の假字は、いよよますく治定なるべし。

又云、東遊歌に云々、風俗歌に云々。こは殊に信がたき説なり。其考はいかに解るにかしらねど、まづ東遊・風俗歌の文字づかひを見るべし。之の字は必シの假字ツカに用ひて、ノの假字としたるところは、ひとつだにある事なし。又ノの假字には、乃能ノノの二字をのみ用ひて見えたり。さるを「以者太之太江」の一ところのみ、強てノとよまむとすとも、誰かよく諾ふべき。……

又云、『新撰萬葉』に云々。此説さらに聞え難し。直を代テ

⑥と同義に用ゐられたればこそ、直も代も共にアテなりとはいふなれ。

(碩鼠漫筆二五頁)

あたえ(直)

一 アタへ

一 本居宣長 アタヘ 直は『書紀』に阿多比延アタヒエと訓る所ある

皇極ノ巻に「長ノ直」とあり。と、『和名抄』和泉國和泉郡の郷名に、山直ヤマダヘ

也末多倍ヤマタヘとあるとを合せて、阿多閑アタヘと訓べし。かの阿多比延の比延を切め

て閑と云なり。山直は山の末に阿名義末考得ず、延は兄なるべし。韻ある故に、阿を略きて多閑なり。

直ノ字は借字なり。續紀廿八に、庚午ノ年ノ籍に、直アタヘ姓に、費ノ字を書きたりしこともありしよし見ゆ。

(古事記傳全集第一の四二八頁)

二 平田篤胤

『古史傳』八の五に『古事記傳』の説をあ

げ、『名義は直兄アタヒエにはあらざるか。其は常言に、物の替ツを出すことを阿多比をもすなど云を按ツに、天皇命の御手に代ツりて地を治むる由にて直兄と稱る號なりしが、尸とは爲れるならむか』といへり。

三 細井貞雄

『姓序考』改定史籍集覽第一 七册の三三〇頁に宣長の説をあ

げ、『彼思ふに、直はもと職號なりしものの姓となりしならん。其の職なりしときのさまは、其業々をみづからなせしなべに、阿多比延の號つさし也。阿多比は授アタヒにて、授兄アタヒ又は予兄アタヒの意なるへし。さるから其意を得て、直或費字を當し也。如此卑事に近き職なりしから、其人にたえたる事を任されしかば『姓氏録』に、直姓の氏々は職號と地號と相半してみえたり。直職より夫々の業にたえしものを撰定て、事職又國事を授給へりし也。阿多比のことのころをいはんに物を得て、其替りをまたせるを今も阿多比といへり。こはたゞに其物に相替れるの義なり。直の職なりしときも其闕たる職々に相替るの義にとれる號なり。故氏號に職及地號の相半して残れるにて思へ。姓となりても舊卑職な

りしから最下の姓とせられたり』といへり。

文部省編輯寮(語彙)大槻文彦(言海)いづれも、宣長の説のごとし。又

栗田寛の『新撰姓氏録考證』下の一〇〇頁山直ヤマノアタヒの條に『山

直は『和名抄』和泉國和泉郡山直也末多倍郷によれる氏な

れば、也末多倍と訓みてあるべきに似たれど、この地

は、天穗日命の裔孫にて、山を掌る官名を負て、此に住

るがありしより、地名にもなれりと聞ゆれば、也万能阿

多閉と訓べし。さて也万多倍は、その省語なる事を知

るべし』といへり。

四 橘 守部

直アタヘは代兄アタヒヒの義なるべし。

(稜威道別五の四一頁)

五 黒川春村

あたひ(價)の條を見るべし。

此の他、『俚言集覽』市岡猛彦の『雅言假字格』物集

高見の『日本大辭林』落合直文の『ことばの泉』等々

あたえ(直)

たへの假名遣とせり。

二 アタエ

加納諸平の説ありあたひ(價)の條なる黒川春村の説の中に引けり

三 アタヒ

一 谷川士清

あたひ 直字をよめり。物のねをいふ

也。『欽明紀』費アテカヒ。當易アテカヒの義。テカ反タ也。……○姓に、直

をアタヒとよむも同義也。よて『日本紀』に費直とも見え

たり。又アタヒエとよめるも當得アタヒエの義なるべし。『續日本

紀』には、費の一字をも用ゐたり。よて『三代實錄』に費

字を用るを忌て訴へし事など見えたり。

(倭訓栞)

二 飯田武郷

此説編者いふ、宣長の説をさせり。は『神武紀』に「倭直アタヒ

部」『神功紀』に「穴戸直」『皇極紀』に「長直」とある

に依られたるものなれど、なほ直の姓、此他にも見えたる中

に、『景行紀』に「直」『欽明紀』に「葛城山田直」『敏達

紀』に「坂上直」ともあれば、強にアタヒエとあるも頼み

がたし。思ふにアタヒエのエは衍なるも知りがたし。

はアタヒともアタヒエとも二方に云るにもあるべし。これを衍と見る時は、ただにアタヒと

ある方こそ却りて正しかるべけれ。さるは姓の直にあらね

ど、『顯宗紀』に「不以直買」『欽明紀』に「衣糧之費」

齊明紀に「稱其價」をアタヒハカリテとよめるをも思ふべし。其他『伊呂波

字類抄』に「價アタヒ直同」など見え、今の『玉篇』にも、價

をアタヒと訓り。さればヒエを約めて、アタへとも云べき

さまながら、姓の直を正しくアタへと書たる例、ものに見當

らず。さらば、『和名抄』郷名山直を也末多倍とある一を明

證ともなしがたからんか……されど此は猶よく考ふべし。

(日本書紀通釋第一の三四七頁)

近藤真琴も『ことばのその』にヒの假名遣とせり。

あつとこえ(跨)

一 アツトコユ

契沖 跨 あつとこえ。此字常にはまたがるとよむ

を、書にかく點せるは、アツといひて溝などをまたがりこ

ゆる意歟。句絶の所にては、アツトコユといふべし。アツ

トコフとはいふべからず。

(和字正濫鈔卷四の六丁)

二 荻生徂徠 跨をアトコユルといふ。足迹のまたがり

こゆるといふ意なるべし。

(南留別志四の二四丁)

越谷秀眞の『物類稱呼』^{五の丁}に「跨といふ事を東

國にてアゴムと云。跨をアトコユルといふは、足迹アトの
またがりこゆると云意なりとぞ。又アゴムはアトコユ
ルの轉語也』といへり。

三 物集高見

『日本大辭林』あつとこゆの條に、『あつ

とこゆ 跨。またぎこゆ。『類聚名義抄』跨アツト
コウ』

又あつとこゆの條に、『あつとこゆ 跨。またぎこゆ。『顯

宗紀』跨アトコエヨリテ
アツトコウ據』

落合直文が『詞の泉』に記すところ全く同じ。

二 アツトコフ

一 貝原篤信

『日本釋名』二の三に、「跨アトコフ。アトは足

也。コフは越る也。「あしこゆる」意。またがる也』

山岡俊明も『類聚名物考』第五冊の
八三四頁に、「跨 あつと

こふ・あつとこひ。これは古にもさかぬ訓なり。なに

にも見ず。これは中古の博士點の儒書よみし時の訓な

るべし。また後世にはかにいひいだしつべき詞にもあ
らず。『文選』『文集』などもつばら用ゐし世にいひ出
しことなるべし、足越アツトの意もていひ出しなり。この
類ひ外の古にはなき和語もまた多し。步越・跡越等な
り』といへり。

二 石川雅望

あつとこひ 『文選』九 「北山移丈 跨アツトコヒ」

屬城之雄」この跨の字をよませたり。注には「越也」と
あり訓義解しがたし。

(雅言集覽)

● 参考

谷川士清の『倭訓栞』に「あつとこえ。跨をよめり。『日
本紀』にアトコヒと見え、アフトコヒとも見えたり。『新撰
字鏡』に躑跨をアフトコムとよみ、「齊足而踊之貌」と
注せり。常にはマタガルとよめり。又アツトコヒともいふ』

あとうがたり

アトウガタリ

一 富士谷御杖

『後撰集』にあとうがたりといふ事あり。

『實方中將集』に「ためたふの辨なかよりが、いつにたえそめし年、ことしばかりとて、宮へのうへのはしらひたりけるけしさをみて、しりうごとしりうごとに」とみえ、『枕草紙』にもしりうごととあり。此ふたつの詞ともに俗に陰口といふ心なり。アトアトもシリシリも同じ心なればなり。

いたくへだりたる世にはあらねど、あとうがたりはふるく、しりうごとは後にや。『源氏物語』若菜上にもしりうごちとみえたり。此ウウもじは皆音便のまゝをかくにて、もとはアトガタリシリゴトといふべき事なり。されどかくいひな

りたる事は、かくいはではあらぬ事のごとくさこゆるならひ、此詞にかざらずいと多きものなりかし。

(北邊隨筆百家説林正編上の五二頁)

二 伴 信友

あとうがたりはアトガタリともいひて、

互に知れる事をあらはに云はず、他の事を言かけて、擬へて其事と悟らする俗なるが、其を悟り得ざる時は、後にて説り聞する由にてさは云なるべし。

定家卿の天福本の『後撰集』の奥に、爲家卿の行成卿の筆の本に扱へて、「あとうかたりをあとうがたり被書」と

記し給へり。三代集間之事にも「或本アトガタリと書」とあり。○編者いふ、爲家の撰作といひ傳ふる『後撰和歌集注』近代説々相

異事といへる條にも「あとうかたり、あとかたりと被書」と記せり。

此言『洞物語』藤原君卷に「さて物がたらひも打聞えんか。

知れるどちこそあとうがたりもすなれ」と見えたり。これも普通

通本にはアトガタリとあるさればアトウのウはたゞ助て云ふ辭にて、しり

言をしりうごと、しりぎたなしをしりうぎたなしなど云ふ

例の詞なり。

(比古婆衣 百家説林續編中の二二二頁)

岸本由豆流も『後撰和歌集標注』四の二に、あとうの

うを音便とし、『宇都保物語』藤原君卷なる「しれるどち

こそあとかたりもすなれ」を例に引けり。

● 参考

一 藤原定家の『僻案抄』經濟雜誌社本羣書類從 第一〇輯の六〇八頁に「あとうがた

りとは、なぞくがたりといふ事か。『拾遺』にはなぞくがたりとかきたり」といへり。

谷川士清、『倭訓栞』あとうがたりの條に此の説を引

きて「其歌は素盞鳴尊の故事をふまへてよめれば、げにとおもはる。あとなしごとと同義なるべし」といへり。

二 賀茂真淵は『後撰和歌集標注』四の二に「あとうがたり

あまえる(嬌)

は、そのころありし物語などなるべし」といひ、

三 石川雅望は『雅言集覽』あとうがたりの條に「物語の

應答することなり」といへり。

あまえる(嬌)

一 アマユ

本居春庭 あまゆる 『源氏』竹川にあまえて、寄生

にあまえて また『榮花物がたり』にもあり。みなあまえてとのみありて外に活きたること見あたらざれば、波行下二段の活かともおもへど、俗言にアマヤカスといふこと葉もあれば。
編者いふ、『十訓抄』可レ專ニ思慮ニ事といふ條の初に「愚なるたぐひは親のあまやかしのめのもてなすにしたがひて」とあり。

(詞の八衢全集三七頁)

村上忠順(雅語譯解拾遺) 黒川春村(古言梯補遺)

へ)も『十訓抄』なるアマヤカスを證として、ヤ行下二段活用の語とし、

また谷川士清は『倭訓栞』に「あまえる『源氏』

『榮花』などに見えたり。或は驕をよめり。今も兒女子の和悦をもて人に媚るをしかいへり。あまなふと義通へり。「親のあまやかす」といふ詞も『十訓抄』に見えたり。甘葛の過たるを『源氏』に「あまえたるたき物」といへり編者いふ、常夏の巻(湖月抄本二七丁)に「いとあまえたる物のかをかへすくたきしめ給へり」とあり。といへり。

本居宣長(御國詞活用抄第一三會) 加茂季鷹(正誤かな遣) 文部省編輯寮(語彙) 佐藤誠實(語學指南三の一) 近藤眞琴(ことばのその) 大槻文彦(言海) 小田清雄(國語かなつかひ早學) 物集高見(日本大辭林) 落合直文(詞の泉)等いづれもヤ行下二段活用の語となし、『俚言集覽』石川雅望の『雅言集覽』清水濱臣の『語林類葉』また

アマエとせり。

二 アマフ

伊勢貞丈

あまへてと云ふ詞、古今差別。『榮花物

語』浦々の別の卷に、「さても此の御事は此御事とは伊周公流に立歸り都にかくれある事を告げ申したるを云ふ。越後守平親信と云ふ人の子、いとあまた有りける中に、右馬の助たかよしと云ひて、うたうたひ折ふし陪從などにめさるゝ有りけり。それが申し出でたりける事なりければ、おほやけの御爲に、うしろ安き事申し出でたりとて、加階たまはせたりければ、歡びいひに、父が許にいさたれば、親信の朝臣、いづこにたがもとゝて爰にはきつるぞ。おほけなくつれなくもあるかな。かやうの事我等がほどの人のいひ出づべき事に非らず。かゝる事は、えびす町女などこそいへ。淺ましう心うきことをいひ出でて、人の御むねをやさこがし、なげきをおふ、よき事なりやとて、

いとはしたなくいひのしりければ、あまへて逃げにけり云々」

此あまへてと云ふは父に叱られて、父をあがめつゝしみて退きたるを云ふなり。あまへはあがまへの約詞なり。あ

がまへはあがめなりまへの切音めなり如^レ此古の詞にては、あがめる事

をあまへると云ふなり。編者いふ、『俚言集覽』あまえるの條なる愚案にも、この榮花物語なるは、アガマへの約

言にて、アマエルとは別語なりとし、『言海』『日本大辭林』『詞の泉』等にも、アマユといふ語の外にアマフといふ語を出して、「謝する義」なりと注し、榮花物語を例に引けるもあり。谷川士清・本居春庭等はアマユと同意にこれを解せること前に見ゆるが如し。今世の俗語に、

小兒の父母の愛に乗じて、おやをあなとり教をえず、我まゝするをアマヘルと云ふ。是れは、食物のうへにたとへて、おやを苦くも辛くも思はず、甘く思ひて我まゝするを云ふ。元來おやの方より子をいませしめずあまくする故、其子おやをあまく思ふなり。是れを俗にアマヘサスルといふなり。古の詞のアマヘルとは大に其義たがへり。

(安齋隨筆 故實叢書本二四七頁)

あまえる(嬌)

鈴木脰も『雅語譯解』に「あまへて云々 親しみ

なる意也。俗に云に同じ事あり。又ツバエル・ホタエルの心もあり。あまは甘なるべし」といひ、橘 成員の『倭字古今通例全書』山岡俊明の『類聚名物考』第四册の二九頁等にもアマへとせり。

三 アマユ・アマフ

行阿の『假名文字遣』一六に「あまえてあまへてとも 甘苦・甘辛」
『同書』二二に「あまへてあまへてとも 甘辛・甘苦」
『同書』五二に

「あまふる 甘辛・甘苦」

四 未定

岡本保孝の『古言梯補遺』に「あまへへカエカ」とあり。

● 参考

あらかじめ(豫) あるいは(或)

本居春庭の『詞の八衢』全集三 二頁 にかかふるの條に、「也行
下二段の活にて、かかゆ・かかゆる・かかゆれ・かかえといふ
詞かとも思へど、すべて物をしかするは、おほく波行の活詞
にいひ、ものものづからしかるは、也行の方にいへば、猶
波行の活詞なるべし」といへり。

あらかじめ(豫)

アラカジメ

一 松永貞徳 豫 あらかじめ。 あらかはあらか
歟。しめはしむるか。しむるはとぢむる心。懇に云かため
ぬ也。あらくと云そむるやうの義か。

(和句解四の三七丁)

二 谷川士清

あらかじめ 『日本紀』に豫字をよめり。

有く始めの義。くは反か也。

(倭訓栞)

岡本保孝の『古言梯補遺』に、「有く始め」と云事、
淺學、解かぬるなり。よく考ふべし。友人清水光房は
谷川氏説よろしといへり」とあり。

『俚言集覽』あらかじめの條の愚案に、「アラクハ
ジメとは事の有るその始めの義也」といへり。

三 大石千引

『言元梯』に 『豫』アラカシメ 略假領

四 大槻文彦

あらかじめ 預豫 アラカリシメ 粗假占の約か。粗ク

ヘツ初めの約か。

(言海)

あるいは(或)

一 アルヒハ

一 楫取魚彦

あるひはアルヒハ 一謂也。或。

(古言梯)

春登(假名音便撮要) 大槻文彦(言海)の説また同じ。

二 谷川士清

あるひは 或をよめり。「非必之辭」

と註せり。有に疑をもたせたる詞なれば、ひは日にや、又ア

ルヒトともよめば、有人はの略成べし。又あるはとのみも

いへり。「助語辭」に「不指名其人指名其事但以或」

字代之」と見えたり。梵書に「有人」とも「有云」とも

見えたり。「神代紀」に一書をアルフミとよみ、「古事記」

に一時をアルトキとよめるも意同じ。さればアルヒハは

「アルヒハ謂ハ」の義也ともいへり。

(倭訓栞)

此の他、文部省編輯寮の『語彙』物集高見の『日本

大辭林』は『類聚名義抄』の訓をあげてヒの假名遣と

あるいは(或)

し、

行阿(假名文字遣) 契沖(和字正濫鈔)をはじめ一般

にヒの假字とせり。

松永貞徳の『和句解』四の三に「或 あるいは。あ

るは有か。いは謂也」とあり。語源の解釋によればこ

れまたアルヒハの假名遣説とすべきなり。

二 アルイハ

岡本保孝

『古言梯』「あるひは。一謂也」といへり。

谷川氏も「アルヒハ謂の義也、又は有人の義か」といへり。いづれ

にしてもヒの假字也。此二説おだやかにもさこえず。もし

はアルハと云詞に、音便のそはりたるにて、イの假字にはあ

らずや。ウクスツヌフムウルウの下にイの音便そはりたる

は、字音にては、「由緒」言葉にては「六日」これ也。谷川

氏云「ムユカと云は、ムウカの轉にや」といへり。孝云、ムカの音便にてムウカとも

て、後々は、ムユカノアヤメなどと、うたにさへよむ也。その實は音便よりユと轉じたる也。

(古言梯補遺)

あわあわし・あわつけし・
あわつかに

一 アハくシ・アハツケシ・
アハツカニ

一行阿

『假名文字遣』^{四三}に「あはくし 淡今敷」

と注せり。今の字は々の誤なるべし。一本には、淡々とありて今敷の二字なき由、赤堀又次郎の『語學叢書本』に注せり。

橘 成員(倭字古今通例全書) 楫取魚彦(古言梯^{あは})

條の 鈴木 脹(雅語譯解) 市岡猛彦(雅言假字格^{あは})

條の 『俚言集覽』文部省編輯寮(語彙) 近藤真琴(こと

ばのその) 大槻文彦(言海) 物集高見(日本大辭林)

落合直文(ことばの泉)等いづれも淡^{あは}々^{あは}シ^{あは}の義とし、
五井純禎の『源語梯』^下の 本居宣長の『御國詞活用抄』^{第二} 七會 石川雅望の『雅言集覽』にもハの假名遣とせり。

二 四辻善成

『河海抄』^{國文注釋全書} 本二七六頁 に「あはつけさや

うにも 淡付。あはつけ同詞也」とあり。

中院通勝(岷江入楚^{國文注釋全書本} 中の一五八頁) 賀茂真淵(源氏物

語新釋^{全集第五の} 四五四九頁 萬葉集略解^{ハの三} 七丁) 谷川士清(倭訓栞)

村田春海(假字拾要) 鈴木 脹(雅語譯解) 文部省編

輯寮(語彙) 近藤真琴(ことばのその) 物集高見(日

本大辭林) 落合直文(ことばの泉)等また淡^{あは}の義とし、

五井純禎(源語梯^下 三丁) 石川雅望(雅言集覽) 『俚言

集覽』佐藤誠實(語學指南^四 〇丁) 大槻文彦(言海)等も

ハの假名遣とせり。

三 素寂

『紫明抄』^{内閣本天} の一九丁 に「あはつかに 淡漬也。

あはくしき詞也』と云へり。

四辻善成の『河海抄』國文注釋全書本三六頁にも「あはつかに

淡々しき也。君子之交也淡如水莊子』と注せり。

賀茂真淵の『源氏物語新釋』全集第五の四四九三頁 谷川士清の

『倭訓栞』あはつけしの條 本居宣長の『玉の小櫛』全集第五の一二七四頁 石川

雅望の『雅言集覽』近藤真琴の『ことばのその』物集

高見の『日本大辭林』落合直文の『詞の泉』等も淡の

義とし、

『俚言集覽』五井純禎の『源語梯』下の二丁 鈴木 脰の

『雅語譯解』文部省編輯寮の『語彙』またハの假名遣

とせり。

二 アワくし・アワツケシ。

アワツカニ

一 萩原廣道

あわつかに『新撰字鏡』に惶急を阿和豆

あわあわし・あわつけし・あわつかに

と訓り。これなるべし。かれ今は假字も、ワと書つ。かは例の形容の辭也。「あわてふためき」などいふあわても同じ辭にて……あわつけしといふも、また活かしたるにて意は同じ。此外、あわくし・あわたしなどいふ、皆此類の語なり。いづれもワと書べし。

(源氏物語語釋一の二六丁)

井上文雄も『伊勢の家づと』二の二の六丁に「あわくし

古き注に、淡々しの意とせるはよしなし。文雄按に、此

詞は、もと惶急アワツの轉じたるなるべし。物にあわつるは、

心のづじやかならぬ故なれば、一轉して、人をいひくた

しあざけるやうの意にもなれる也。あわつのツ文字を

省きて、あわくしとかさねいへるは、『紫日記』に、

あさやかなるをあさくしといへり。又『金葉集』に

「數ならぬ身をうち橋のはしく」といはれながらに戀

わたる哉」とあるも、はしたなしを下略して、はしは

しといへり。今俗の密事をみつゝ團子をいしゝな
どゝへるに同じ』とさへり。

はやく『岷江入楚』國文注釋全書本 上の一〇五頁に三光院實枝の説

として『あはつかにはあはゝしき體なり。あはた

ゝしきなどいふ類の詞なり。アハタマシ周章』とあり。アハタマシ周章と

注せるによればアワツル意にて廣道と同説なるべき
か。

あわただし(急遽)

一 アワタマシ

一 契沖

周章 あはたゝし。あはてあはつる皆同じ。

(和字正濫鈔四の四〇丁)

契沖の説は、あわたゝしあわつ同一語源なりといふ

説なり。あわつの假名は、『天治本新撰字鏡』(一二の
二四丁)に惶急を阿和豆と訓し、『同書』(一二の二六
丁)に狼狽を安和豆と訓せれば、ワの假名なること明
なり。さてあわたゝしあわつ同一語源なりとせば、あ
わたゝしの假名またワなるべきこと論なし。然れども
契沖の頃は、『新撰字鏡』いまだ世に出てざりしかば、
あわつの假名遣明ならず。よつて舊慣のまゝにハと定
めしならむ。若し當時あわつの假名ワなるべき確證あ
りたらむには、必ずあわたゝしの假名をもワとせしな
るべし。よつて今はワの假名遣説として擧げたり。

楫取魚彦(古言梯) 市岡猛彦(雅言假字格) 萩原廣

道(源氏物語語釋一の二) 敷田年治(音韻啓蒙下の五)

文部省編輯寮(語彙) 大槻文彦(言海) 物集高見(日

本大辭林) 落合直文(詞の泉) いづれもアワツと同一

語源とせり。また『落窪物語證解』國文注釋全書に 本六五九頁に「あ

わたゞし 直磨按ずるにアワテ〜シキと云へる轉語なり」とあり。

はやく素寂の『紫明抄』内閣本天の三二丁に「心あはたゞしく

周章也」行阿の『假名文字遣』四三丁に「あはたゞし周

章」四辻善成の『河海抄』國文注釋全書本五九頁に「心あはたゞ

しくて 周章擾也」などあるも、あわたゞしあわつ

同一語源にて、あわたゞしはあわつる状をいふなりと

解せるにはあらずか。

二 谷川士清

あわてる 『日本紀』に急字・遽字・惋字

をよめり。『文選』に周章をよみ、あわたゞしともいへば、

沫立の意を轉用せる成べし。

(倭訓 栞)

坂 徴の『かげろふの日記解環』國文注釋全書本五〇七頁にも、

「世に多くは、アハとかけれども、此詞は、水の泡だつご

とさを形容せしと治定して、かなをアワに作りぬ」と

あわたゞし(急遽)

記し、

『落窪物語證解』國文注釋全集本六三四頁にも、「濱云、あはたゞ

しくは泡立にて、心のちちぬにや。さらばアワの假

字なるべし」といへり。濱とは清水濱臣なるべきか。

明ならず。

又岡本保孝も沫立の説なりしにや、『言靈』九丁の一に

あわたゞしとあげ、『雅筵醉狂集』附録丁四なる「筏士

にとへどしら波あわたゞしやなのさび鮎さぞ大井河」

といふ狂歌を例に引きたり。

『俚言集覽』にはあはたゞしと擧げたり。されど、

『盛衰記』四十一にありとて「都にありしものも泡たゞ

しく」といふ例を引きたるより推さば、なほワの假名

遣説なるべきか。

アラタマシ 惶急 彌噓立アラ、タ、シ。大聲立也。

三 大石千引

(言 元 梯)

『俚言集覽』あわてるの條の愚案に、『和訓栞』の説をあげ、『沫立の意といへるは非ならん。アは發語。ワは遽に駭く聲也。然ればワといひて驚き騒ぐをアワツルといふなるべし』とあるは、アワツの語源説なれど、千引の説によく似たりといふべし。参考のために附記せり。

二 未定

鈴木腹の『雅語譯解』に『あわたし アワかアハか未詳』とあり。

あんこう(鮫鯨)

一 アンカウ

橘 成員の『倭字古今通例全書』に『あんかう 鮫鯨。未詳』といへり。

横島昭武の『合類大節用集』五の三に『華臍魚アンガウ 老婆』

並全。鮫 同 鯨 和俗 所レ用 貝原篤信の『大和本草』七の二に

『華臍魚』アンカウ ○國俗鮫鯨と稱す。未見出處恐可爲

妄稱 谷川士清の『倭訓栞』に『あんかう 泉州

府志』にいふ華臍魚也といへり。鮫鯨とかくは俗の作り字なり』といひ、

大槻文彦(言海) 物集高見(日本大辭林) 落合直文(ことばの泉) 等いづれもアンカウの假名遣とし、鮫鯨の字を記せり。

二 アンコウ

文部省編輯寮

あんこう 方今は清てアンコウと稱

す。『類聚往來』 鮫鯨アン 『古節用集』 鮫鯨アン

(語彙四の二五丁)

寺島良安の『和漢三才圖會』活本七
四一頁に『^{アンコウ}華臍魚

俗云阿牟古字』山岡俊明の『類聚名物考』第六册の
四六一頁

に『琵琶魚 ^{あんこう} あんこう』とあり。

三 アンゴフ

敷田年治 ^{あんどふ} あんどふ 魚名 常に鮫鱧と書けり。然ら

ばアンカウならめど、さる魚名を聞かず。『薬名備考』に一名アンゴとあればアンゴフと定めつ。此魚西國には見えず。

(音韻啓蒙下の五〇丁)

いきおい (勢)

一 イキホヒ

いさほひ (勢)

一 楫取魚彦

^{イキホヒ} いさほひ 息競也。

(古言梯)

春登(假字音便撮要) 大槻文彦(言海)の説また同じ。

二 谷川士清

『倭訓栞』に『^{いさほひ} いさほひ 勢をよめり。息延の義なるべし』

三 鈴木重胤

『日本書紀傳』七の一
九五頁 辭氣イキザンの注に、『神氣

の内に充つる時は、自然其氣外に進む故、此を伊佐牟とは云ふなり。即氣進イサムの義なり。又其氣、外を覆ふ計なるを伊伎保比イキホヒと云ひ、又自其氣はひを言ふにも、色にも差呈はすを伊伎邪志とは云へるなりけり』

此の他行阿(假名文字遣二六丁
三九丁) 契沖(和字正濫鈔二の二
一丁)をはじめ、一般にホの假名遣とせり。

二 イキオヒ

或人の説

貝原篤信の『和字解』に『或説、勢の字

いきほひとかくと云はひが事也。氣生イキオヒの意なる故オの字をかくべし』といへり。なほ『日本釋名』二の二にも同意の説あり。

◎ 参考

松永貞徳 『和句解』一の五丁に「勢 いきをひ。生てきほふなり。息追歟。いきづきはやさこゝるか」とあり。

いきだわし(喘)

一 イキダハシ

貝原好古の『諺草』一の二に「煩悶イキダハシ いきどをしは誤」といへり。

近藤真琴(ことばのその) 大槻文彦(言海) 物集高

見(日本大辭林) 落合直文(ことばの泉)等もハの假名遣とせり。

二 イキダワシ

谷川士清 『いきだわし』息の撓イキダワシむ意なるべしイキドヲシともいへり。タワ・トラ通ぜり。

(倭訓栞)

いきる(煩熱)

イキル

一 谷川士清 『いきる』鬱蒸の氣をいきるといふは氣をはたらかしたるもの成べし。○『靈異記』に酖イキリホトルをイキリシとよみ、酖熱とつゞけり。

(倭訓栞)

二 文部省編輯寮

いさる

『遊仙窟』

眼華耳熱

『以呂

波字類抄』熱イキル

(語彙卷六の二丁)

いさぎよし(潔)

イサギヨシ

一 谷川士清

いさぎよし

潔をよめり。

勇み清しの義

成べし。濁をよむも、濁除して後潔清なる也。

(倭訓栞)

二 大石千引

『言元梯』に

「イサギヨシ潔」

「イヤギヨシ彌清」

と注せり。

三 大槻文彦

いさぎよし

潔。

イサは彌イヤの轉か。

或は

發語か。

(言海)

石川雅望は『雅言集覽』に、『文選』

賦西都なる

「イサギ鮮

ニ

顯氣之清英」

を引き、

文部省編輯寮の

『語彙』

卷六の

三丁

には

『孝徳天皇紀』なる

「其郡司並取

下國造性識

清

廉ヨクテ堪

ニ時務一者

爲大領少領」

および

『以呂波字類抄』

浄・清潔齋等の傍訓

『平他字類抄』

潔の傍訓、

イサギヨシとあるを擧げていづれもイの假名遣とせり。

いさこう(諍)

イサカフ

一 楫取魚彦

いさかひ

いさかふ

『祝詞』伊須呂許比と

あり。呂と良通、須良の約佐也、加と許又かよふ。諍。

(古言梯)

二 谷川士清

いさかふ

闘又諍をよめり。

競逆イサの義な

るべし。

(倭訓栞)

三 伴信友

いさかふ

『大和物語』

「いさかふなり」

『落くぼ』「いさかひて」『徒然草』「いと尊さいさかひな

るべし」○信按、「叱イサ」と云と同言より出て、呵るや

うの意の詞なり。……闘諍の義にはあらず。編者いふ、類聚

咄をイサフと訓し、字鏡集にも、化・噉・咄・噉・呵・嚇・叱・皆・譴・訶・制等をイサフと訓せり。

(増補語林倭訓栞)

四 小山田與清

『俊頼口傳』廿五段に

「うらなくてい

そにみるめはかりもせよいさかひをさへひろふべしやは」

と云歌有。こは貝をひろふとそへたり。いさは否の義也清

てよむべし。

(増補古言梯標註)

此の他、大石千引(言元梯)は言騒合イ、サレギアヒ、大槻文彦(言海)

は言逆イヒサカフの約とし、

文部省編輯寮(語彙) 物集高見(日本大辭林)は『以

呂波字類抄』に「闘イサカフ」とあるにより、いづれ

もイサカフの假名遣とせり。

いさば(五十集)

イサバ

谷川士清

いさば

今魚肆をいへり。磯端イサの義にや。

又勇魚場イサバにや。○船の名にいさばといふも魚肆より出てた

る名成べし。○西州にて魚の名にもよべり。

(倭訓栞)

文部省編輯寮の『語彙』卷二の三四丁に「いさばや 磯邊

の義にして、醜魚など商ふ人をいふ」といへり。

また物集高見の『日本大辭林』には磯場の義とし、『日本百科大辭典』に、赤堀又次郎は、「漁場の轉か」と注せり。

いちおう(一應)

一 イチワウ

榎島昭武

イチワウ 一往 『通鑑』漢獻帝紀

(合類大節用集八上の二丁)

貝原好古も『諺草』益軒全集卷三の七九五頁に「一往」ワウ。溫公通鑑

漢獻帝紀にあり」といひ、

文部省編輯寮の『語彙』にも「いちわう ひとたび

又ひとわたりといふ意なり。○一往」と記せり。

いちおう(一應) いちじく(無花果)

二 イチオウ

大槻文彦の『言海』落合直文の『ことばの泉』等ともに一應の字を書しイチオウの假名遣とせり。

三 イチワウ・イチオウ

物集高見

いちおう

一應

ひとたび、ひとわたり。

いちわう

一往

ひとたび、ひとわたり、ひととほり。

(日本大辭林)

いちじく(無花果)

一 イチジク・イチジユク

一林

道春

無花果

波奈々志久太毛乃。今案一

熟也

(多識編 三の一五丁)

二 寺島良安

いちじゆく 無花果。俗云一熟又云唐

梯。『本綱』「無花果出揚州及雲南處々南海。折枝插成。枝柯如枇杷樹。三月生葉。有^レ如^ニ蓖麻^一。樹高丈餘。五月内不^レ花而實。實出^ニ枝間^一。狀如^ニ木饅頭^一。其内虚軟。采^レ以^レ鹽漬^テ壓^テ令^レ扁^{ナラ}日乾充^レ果食。熟則紫色軟爛。甘味如^レ柿而無^レ核。一月而熟」

按無花果其實似^レ柿而本窄。俗曰^ニ唐梯^一。一月而熟故名^ニ一熟^一。其樹雖^レ似^ニ枇杷^一不^レ然。枝柯婆娑葉似^ニ蓖麻^一而小。背色淡潤文理隆明。

(和漢三才圖會活版本一六三〇頁)

瀧澤 解も『俳諧歲時記』三の二に『無花果 和訓

一熟の義也。一月にして熟するの名』といへり。

三 谷川士清

『和訓栞』に『いちじく 映日菓也。唐が

まともいふ。一熟の義。菓の類にて第一はやく熟するの意

なるべし。……無花果は近世渡り來れり。是も名を同じう

す。よく似るをもてなり。黄色の花あり。至^一小也^一』

四 或人の説

岩崎常正曰、或説に此樹實を結ぶ事多し

といへども、すべて一時には熟せず。たとへば今日一つ熟すればまた明日一つ熟し、日毎に一つづつ熟する意にて一熟ともいへるといひ、『和漢三才圖會』無花果の注に「此菓一月而熟故名一熟」と云しはおそらくは誤なるべし

(古今要覽稿國書刊行會本第五の二三五頁)

大槻文彦の『言海』いちじゆくの條に『いちじゆ

く一熟の音。果類にて第一に熟する意と云。いぬび

はの一名。天仙果』『いちじゆく 舶來品にて實

天仙果に似たれば其名を襲ふと云。或云一月にて熟す

る意と。……無花果』と注し、いちじゆくの條に、『い

ちじく いちじゆくの訛』とあり。

落合直文(ことばの泉)も『いちじゆく 無花果』

『いちじく いちじゆくの訛』とし

物集高見(日本大辭林)は『いちじく。いちじゆくに

同じ』と注せり。

此の他橘 成員の『倭字古今通例全書』にも『いち

じく 無花果實』と注し、小野蘭山の『本草綱目啓

蒙』卷二七の 一丁にもジの假名を書せり

二 イチヂク

或人の説

イチヂクは映日菓の上下略にして轉音な

り。

(古今要覽稿國書刊行會本第五の二三五頁)

貝原篤信の『大和本草』卷一二の 二九丁にも無花果をイチヂ

クと訓せり。

いちよう(鴨脚子)

一 イチヤウ

林 道春

銀杏。今案伊長ル。俗云銀安ニ

(多識編 三の一四丁)

橘 成員の『倭字古今通例全書』にも『いちやう

銀杏』とあり。

二 イチエフ

一 貝原篤信

銀杏イチヨウ 一名鴨脚子。倭名イチヨフ一葉の

意なるべし。

編者いふ、イチヨウ、イチヨフとあれど、葉の假名はエフならざるべからず。

(大和本草卷一〇の三〇丁)

寺島良安も『和漢三才圖會』活本一 六二〇頁に『銀杏イチエフ 俗

云一葉』と注せり。

いちよう(鴨脚子)

三 イテフ

谷川士清 いてふ 一葉の義也。チエ反テ也。各一葉づゝわかれて叢生せり。よて名とす。

(倭訓栞)

大槻文彦(言海)も「いてふ 一葉の約と云」といへり。

此の他文部省編輯寮の『語彙』には『尺素往來』『古本節用集』なる銀杏の傍訓によりてイテフとし、横島昭武の『合類大節用集』^{卷六上}の「物集高見の『日本大辭林』落合直文の『ことばの泉』またイテフとせり。

松永貞徳の『和句解』^{四丁}に「銀杏、いちやう。葉の形、蝶に似たれば、いねたる蝶と云心歎。いてうと云を訛て、ちやうと云歎」といへり。蝶の假名はテフなり。されば、これまたイテフの一假名遺説といふべき

なり。

四 イテウ

森 立之 岡本保孝の『言靈』^{二の五}に「異朝ノ木ギンナン。森 立之ノ説」と注せり。

五 イキヤウ

黒川春村 鴨脚子を俗にはイテウと呼べど、此假字いまだ詳ならず。或人の説に、一葉の義なめれば、イチエフと書べしと云へり。此説如何。おぼつかなし。……但し此樹は、此方の古書どもに見えねば、和名未詳。たゞ銀杏と實を呼て、イチヤウとのみ木を云ひなれたるも、近世の俗習なるべし。……

さて此銀杏の物に見えしは、『尺素往來』^{雜草}に銀杏『古鈔本節用集』^{天文頃の古本なり}に銀杏^{イチヤウ}鴨脚 『同饅頭屋本』『易林

本』『慶長十六年本』等も、亦銀杏イチヤウとあり。又『後水尾院年中行事』に「十月のこの、亥に當る日也。中略小高檀紙につゝみたるを給はる也。初度は菊と忍と、中度は紅葉と忍と、三度はいちやうと忍となり。銀杏の葉に、申出す人の名を書て、包紙にさしはさむ也。云々」『女房私記』に云、「この近頃は御げんじよ。諸臣に給ふ時、外様大納言は小角にのせ、鴨脚に名を書付る云々」など見えたれど、此外にも猶あるべし。

但しその一葉と云ふは、他の説に従ひたるにて、實に我おもふところは、別に今一説あり。さるは文明十八年の鈔本『續羣書類』所收『類集文字鈔』下上卷木類部に 銀杏イチヤウ とあるを宜しとすべし。こは銀の唐音インなるを省呼し、杏ハヤウは本音を用ゐしにてハキの假字の古體也此文明の頃までは、イキヤウと云ひけん事しるかり。さるを其後よこなまりて、いつしかイチヤウとなれりしなるべし。されば一葉イチヤウの説も理りげなる物か

いてる(互)

ら、銀杏イチヤウのかたをこそ正説とはすべけれ。

(碩鼠漫筆二三四頁)

いてる(互)

一 イテル

谷川士清 いてる 俗に寒氣厳しく土地のこほりたるをしかいへるは、いためるの義。タメ反テ也。よていてつくともしひ、其解るをイテドケなどもいふめり。凍の字の意也。

(倭訓栞)

山岡俊明の『類聚名物考』第四冊の三一七頁に「いてる 氷を今俗にもイテルといふ ○『堀河院太郎百首』氷室隆源「冬さむくいてし氷を埋めちきてはや氷室とはい

四九

ふにぞ有りける』といへり。

この他大石千引の『言元梯』に「イテル涸陰ホトツ氷閉ル。トツ約、テ」
と注し、

石川雅望(雅言集覽) 岡本保孝(言靈二のセ丁) 物集高

見(日本大辭林) 落合直文(ことばの泉) 等いづれも

『堀河院百首』を語例に引き、イの假名遣とせり。近藤
眞琴の『ことばのその』大槻文彦の『言海』もイとせ
り。但し『雅言集覽』を除く外は、タ行下二段活用の
語とし、いてるをその轉訛とせり。

二 未定

『俚言集覽』 いて 寒氣にて陶氣などの破るを云。

假字未考。『堀川百首』「冬さむくいてし氷を埋おきてはや
氷室とはいふにぞありける」『小町踊』冬氷「ゐてつくは
もみぢの橋も立田川」了首

いとけなし(幼)

イトキナシ・イトケナシ

一 楫取魚彦 『古言梯に』「いとけなし いたはしげ
なるなり」

二 谷川士清 『倭訓栞』に「いとけなし 幼稚をいふ。
いとけなしともいへり。今いふいたいたけにて、なしは助の詞
か。又无ウ言解コトの義。物毎にいひたらはぬ意。をさなしと
同じ義成べし」

大槻文彦の『言海』に「いとけなし 幼。傷氣痛イタケイタ
し
の轉か」とあるは、士清の一説と同じ意なるべし。

三 大石千引 『言元梯』に「イトケナシ幼 最利イトキ、ナン无」

四 寺田長興 『太津可豆衛』に「いとけなし 幼稚を

訓り。『梯』に「いたはしげなる也」と有は聞えがたし。
甚イトキナシ氣無の義なるべし。

林 甕臣も『日本語原の研究』一五に「いとけなし
は最イ氣無キしの義」といへり。

五 敷田年治 『音韻啓蒙』上の二丁に「いとけなし」『仁徳
天皇紀』に「天皇幼オトキナクンサトク而聰明サカシク叡智云々」是は於オに通へ
ば必阿行のイなり」

いとゆう(遊絲)

イトユフ

一 契沖 絲遊。いとゆふ。糸にてしたる木綿ユフに似たれ
ばかくいふ歟。『新撰萬葉集』には遊絲をカゲケロフにか
せたまへり。

二 賀茂真淵

いとゆふは、遊絲を後の世の人の、強ひ
て、この語めきていひし俗語なるべし。もし又古へより
いひたれば、糸木綿の意にて、ゆふの糸に見なしたるか。古
さものにみえねば用ふべからず。『六百番歌合』「のどかな
る夕日のそらをながむればうす紅にあそぶ糸ゆふ」
(圓珠庵雜記百家説林正編上の七四二頁)

萩原廣道も『さよしぐれ』一六に「陽炎カギロヒの事を、か

らもじに遊絲とかけるを、イトユフといひ、またアツブ
イトともよめる類、絲をイトといはむはこともなけれ
ど、遊をユフといへるは、たゞにもじごゑと聞えていか
ゞなり。遊字は尤韻にて漢音イウ、吳音
イユなれば、假字さへたがへり。されど、これはすでに
しかいひならひては、詞がらのいうなるうへに、やゝふ
るさ歌にも例多ければなほ用ふべし」といへり。

三 黒川春村

清水濱臣の『據字造語鈔』云、「按ずる

に遊絲は、古く絲ゆふとのみ歌によみ來れるを、此『永久四年百首』には、七人みな遊ぶ絲とよめり。是より先にありしや、大方見あたらずやうなり。遊絲の字にすがりてよめれど理り協はず。近頃の歌には、凡てよむことながら、心あらん人は庶幾すべからぬ事にこそ以上と見えたるをおもふに、古く絲ゆふとのみ歌にもよみ來れりと云へるは、いともいとも不審き説なり。

そもそも遊絲を歌の題とせしは、此『永久の百首』よりさきには、いまだ見もおよばぬ事にて、これを又絲ゆふとよめるは今すこし後なるべし。さるは、『丹後守爲忠朝臣百首』に野外遊絲の題見えて、例の遊ぶ絲とよめる歌四首あり。按ふにこは、『永久百首』にならへるなるべし。

さて其外に今一首兵庫頭源仲正うた「野邊みれば春の日暮の大空に雲雀とともに遊ぶ絲ゆふ」とよめるありて、これ絲ゆふとよめる歌の根源とおぼしきなり。此爲忠家百首は一題八首の例なれど、遊絲の歌のみは、以上五

首ありて三首欠たり。此百首詠ありし時代は、永久より二十年許後なる、保延の頃なるべし。しか思ひとらるゝ故は、長承三年十二月十九日『中右記』に「今夕院渡御三條烏丸新御所云々、丹後守爲忠造進也、爲忠叙正四位下」とあると『外記日記』久安四年正月十三日の條に「故丹後守爲忠入道」と見えたるに依てなりかし。さて又保延より六十年許後なる『六百番歌合』按ずるに建久五年に係れりに、此題を出されたるには、大方は絲ゆふとのみ詠れて、遊ぶ絲とよめるは少なし。かれば遊ぶ絲の方よりも、絲ゆふはすこし後なるが故に不審とは云へるにこそあれ。

さて此ものの名義を、賀茂翁の説圓珠庵雜記首書に「……………」といはれたるは、まづはよろしげに聞えたる物から、猶よくおもふに、然るべからず。

春村つらく稽ふるに『空穂物語』祭使の卷二十に「かくゆふぐれに按ずるに、六月つごもりがたなり。さむだちみすあげて、いとゆふ

のみき帳とも、たてわたし云々」とあるは陽炎をいふ絲ゆふにはあらねど、此名の物に見えたる初なるべし。さて是を、細井貞雄が比校せし古鈔本にはいとゆひのみき帳とあり。是に依て、はじめてしりぬ。絲ゆふは原モト絲ゆひなりしを、よこなまりたるものになむありける。凡て几帳は一幅一幅の上に、絹の平縫の細紐をたれたると、又絲を幾筋も結びたれたると二様ありて、其絲をゆひたれたる方を、絲ゆひの几帳とは云なるべし。但是を訛謬て、絲ゆふと呼なれたるも、既くよりのならひと見えて、祭使の流布本にはしか見え、『榮花物語』音樂の卷五にも、「いとゆふなどのすそごの御几帳、むらごのひもぐして云々」と見えたり。根合卷(四十六左)に、「紅のうちたるふたあひのふたへもんのうはぎ、いとゆふのもからぎぬ云々」とも見えたり。猶考ふべし。猶『雅亮装束鈔』下に、「絲ゆふむすびの狩衣」とあるは、其露の絲を云へるなるべし。空穂物語、吹上卷(古本上十三右)にも「ぢむのたいばむこつ、いとゆふにうす物かさねて、おもてちうを、一しやく二すむばかりのからわに、ろくろにひきて云々」と見ゆれど、是も例の古鈔本には「ぢむのたいばむ二よるひ、おもてにうす物かさねおほひて、ぢむを一さ

く二すむばかり云々」とあれば、こはさして證ともしがたし。

儲又陽炎を、絲ゆふといふは、上件の絲ゆふによそへて、呼そめし物なるべし。さるは此陽炎の異名を遊絲といへるに由あればなるべし。但しまことの和名は、『萬葉』にカギロヒと見ゆれど、中昔はカゲロフと呼びしを、白河帝の御世などにても有べし。又絲ユフとも名付そめたり。此ほどにやとおもはるるゆゑは、『狹衣』卷一之上二十に「紫の雲たなびき渡ると見ゆるに、びんづらゆひて、いひしらずをかしげなる童の、さうぞくうるはしくしたる、かうばしき物ふとおりくるまゝに、いとゆふか何ぞと見ゆる、薄き衣を中將君に打かけて、袖を引たまふに、我もいみじくもの心ぼそくて、立とまるべきこちもせず云々」と見えたるこそ、陽炎をしも絲ゆふとよべるはじめかとおぼゆればなれ。さてさし次は彼仲正の歌なり。かゝればささきの絲木綿の説はよろしげにして宜しからず。木綿は、楮木の皮を、麻の如くさきたるをいへり。さればもし絲木綿とつけ

て、木綿を糸といふ理り協は、麻をも糸麻といはるべきに似たれど、しかよべる事ふつに見えねば、絲木綿とも亦いはれぬなるべし。

また遊絲の遊の音訛などいふめるは、いと拙くして、云にたらねば、^{イトコフ}絲結の義と決めたらむこそよからめ。

さてかくしるしをへたるを、大江章雄打見ていへらく、絲ゆふは、白河の御世より、今すこし古く見えたり。さるは『和漢朗詠集』雜部、晴とある題の歌に、「霞はれみどりの空ものどけくてあるかなさかにあそぶといふ」とあり。但寛永の刊本には、あそぶいとゆふとありと云へり。かく云へるに驚きて、一とせ古筆了件より、柳營に奉れりし、公任大納言の眞蹟といふ本、幸ひささに比校して置しを、取出て披き見るに、其眞本も亦あそぶいとゆふとありて、それを墨もてけちたるかたへに、同筆にてあそぶとり見ゆとあり。按ふに、諸本に遊ぶいと見ゆとも、あそぶ絲ゆふとも見ゆる事は、あるかなさかにと云ふ四の句にひかれて、ふと書僻めしが、ひろまれるにはあらかじか。されば彼古鈔本にあそぶ

とり見ゆとあるかたも、しかすがに捨がたく、流布本のみには據がたければ、さのみの證ともいひがたかるべし。

(碩鼠漫筆一三二頁)

いぼう(灸傷)

一 イバフ

谷川士清

いばふ 俗に灸瘡などにいばふといふは

瘡延の義なるべし。

(倭訓栞)

二 イボフ

一 小山田與清

『靱井家日記』丹波國波多野家盛衰の日記なり。卷一云「播

州丹後但馬ヲ手ニ入候ハバ其次ニ中國ヘイボヒ出テ其御家

ヲ打亡シ申覺悟に相違ハナク候ヘバ云々」按に俗に炙のい
假^レぼふといふ詞あり。

(松屋筆記國書刊行會本第一の九三頁)

二 大槻文彦

氏は四段活用の語として、「いぼふ 灸
したる痕、膿み爛る。イボル。灸傷。」と注し、いぼるの
條に「いぼる いぼふの訛」といへり。

(言 海)

落合直文の『ことばの泉』またハ行四段活用の語と
せり。物集高見は、名詞いぼひをのみあげて、動詞とし
ての此の語を脱せり。

三 イボユ

『俚言集覽』

いぼゆ 灸瘡をいふ。燧の字を用う。

假名未考。又イボルとも云。ユとルとは通ずる音也。雅言
には、イハルルをイハユル、射をイユ。イボユのイは發聲。

ホユはホヤクの約りなるべし。ホは火也。因て姑イボユの
假字とす。

いもい(齋)

一 イモヒ

一 賀茂眞淵 齋戒をいもひとよめり。もひの反みに
て、いみといふに同じ語なり。

(源氏物語新釋 全集第五の五三〇一頁)

村田春海(假字拾要) 石川雅望(雅言集覽) 清水濱
臣(語林類葉) 井上文雄(冠注大和物語_{下の一}) 敷田
年治(音韻啓蒙_{下の一}) いづれもイミ(忌)を延べた
る語なりとし、春海は、「齋宮の義にていもゐの假字
ならむと云説あれど、さては叶ぬ所有」といひ、濱臣

は『江家次第』なる以毛比を證にあげ、なほ『河海抄』
國文注釋全書 本、四〇六頁 に、「萬葉。人丸」と肩書して、引きたる、
「神垣にひぼろぎたていもへども人の心はまもりあ
へぬ物を」の和歌等を擧げたり。

また文部省編輯寮の『語彙』大槻文彦の『言海』に
は、いもふといふ動詞の名詞となりたるものにて、いも
ふはいむの延語なりとせり。

二 五井純禎

いもひ いもゐると書べからず。『日本紀』
に齋食をイミヒとよめり。ヒはイヒの義、食也。ミとモは
相通なり。精進するを云。

(源語梯上の五丁)

『倭訓栞』なる谷川士清の説また同じ。

此の他、近藤真琴の『ことばのその』笹村良昌の『假
字の栞』物集高見の『日本大辭林』にもヒの假名遣と
せり。

二 イモキ

一 『色葉和難集』 『本書』卷一の部に 『いもゐ 和云』日
本記』には齋の字をイモキとよめり。精進してゐたるな
り」といへり。

二 山岡俊明

いもゐさうじ 明阿曰、潔齋精進をいふ。
いもゐは物忌にこまれるにて齋居也。

(宇津保物語二阿鈔國文注釋全書本五〇二頁)

三 田中大秀

いもゐは齋居イモヒキのなるべし。
(竹取物語解 三の二五丁)

鈴木 脰(雅語譯解)また忌居の義とせり。

此の他、行阿の『假名文字遣』三八丁橋 成員の『倭
字古今通例全書』等にもキの假名遣とせり。

三 イモヒ・イモキ

落合直文

『ことばの泉』いもひの條に、「齋いもふこと」いもふの條に、「齋いむの延語」と注し、更にいもむなる語をあげて、「齋居 物忌をして居ること」とあり。

いゆ(癒)

イユ

一 楫取魚彦

いえ 痛止也。愈。
イタミヤム

(古言梯)

二 谷川士清

いゆ 愈をよめり。痛止の義。ヤム反ユ也。
イトヤム

(倭訓栞)

三 『俚言集覽』

愈 イユは假字證未考。案ずるにイユ

いゆ(癒) いる(沃)

は本冶工の鑄より出でしなるべし。今冶工、釜鍋の缺漏を補合するをイヤスと云。人の疾を治するも、冶工の彌縫の如くなれば喩へて言ひしならん。

いる(沃)

イル

伴 信友

い 信云、俗に水などあぶせる意。『源氏

物語』真木柱「さといかけ給ふ」火とりの炭をうしろより打

かけ給ふ也。『細流』に沃懸とある宜し。いは沃くことに鑄ると本同言也。

『枕草子』「そと立はしりて、白き水をいかけさよともいはぬに、しありくさまの云々」『榮花物語』根合「内の御にさみの事なをおこたらせ給はねば云々、なほ水などいさせ

給ひてやよろしからむと申せば、そのさほうの御しつらひしてい奉る。いと寒きころたへがたげに見えさせ給ふ」俗に云ふアブセル也。

(増補語林倭訓栞)

いわけなし(幼稚)

一 イワケナシ

一 長慶天皇

『仙源抄』羣書類
従本に

「いわけなき

幼稚。

無_ニ意分。『日本紀』所に可_レ依。各別」とあり。

編者いふ、
日本紀

と注し給へるは、同書、一四の三丁に、「抱_レ屍駭惋不_レ解_ニ所由_一とある駭惋の傍訓に、イ禾ケア禾テと見え、又一八の二丁に、驚駭をイワケテと訓し、二四の一丁に、「喘息而來問」とある喘息の訓に、イ禾ケテとあるを指したまへるなるべし。素寂の紫明抄(内閣本、地の四八丁)にも「いはけたる日本紀、驚駭也」とあり。

二 五井純禎

「いわけなき

幼稚の人を云也。幼稚なる

時は、ものゝわきまへなきものなれば、イワケナキといへり。イは發語の詞也。『日本紀』の驚駭イワケとあると別也。

(源語梯上の一丁)

加茂季鷹も『正誤かな遣』に「イは發語にて、わけなしの意歟」といへり。

『落窪物語證解』國文注釋全書
本六四〇頁に

「直案、純禎が『日本

紀』に驚駭とあるとは別なりといはれしはよろしからず。イワケは俗にいへるタワケなる事、又ツマラヌことなどいふ意にして、たはれたる事するは、餘所目よりはおどましく打おどろかるる物なれば、やがて驚駭と同語なり。『竹取物語』「御心地もたがひてから櫃のふたに入られ給ふべくもあらず。御こしはをれにけり。中納言はゆわけたるわざしてやむことを、人に聞かせじとしたまひけれど、夫を病にていとよわくなり給ひけり」と有を考ふれば、たはけなることをしてといふ

義なること明らかなり。さればナシといふ詞、助字にはあらず、則有無の無にして、驚駭する色もなくおとなしやかなるをも、戯しきことなき意をも兼たる事、『榮花』に「おとなびさせ給ふ」とあるをもてしるべし」といへり。

三 谷川士清

いわけなき 幼稚を物にかくいへり。いとけなしと同じ。物に驚きやすき時なれば、上の義編者いふ、條に「いわけ、日本紀に驚駭をよみ、又喘息もよめり。驚く時は、必ず息のあへぐものなれば同言なるべし」とあるをさせるなり。と通へり。

いわけてとも侍れば、是もなきは助の詞なるべし。編者いふ

契沖の源註拾遺(國文注釋全書本、一三〇頁)にもなくをあらけなくおほけなくなどのなくと同じくたゞ詞歟といへり。 又いは發語、別無の義なりともいふ。

(倭訓栞)

四 小山田與清

『言靈』丁「いわちどりの條に、『日本紀』なるイホケアホテ、イロケテ、イホケテ駭・驚駭・喘息等、いづれも驚きさわぐ意なるが、轉じては物語書に幼稚をいわけなきといへるも、物

いわけなし(幼稚)

におどろきやすきよしの名也」といひ、『源氏物語』の紅葉賀に「心なげにいわけてきこゆるはなどさぶらふ人々も

きこえあへり云々」夕霧に「なほいといわけつよき御

心おきてのなかりける云々」繪合に「ゆめにもいわけた

る御ふるまひあらばこそ云々」螢に「いわけたるひな

あそびなどのけはひの見ゆれば云々」『榮花物語』かゞや

く藤壺に「いわけたることなく云々」などあるも、「幼

こめきたるさまをいへり」となし、

なほイワの義を解して、「いははよわと通ひて心よわく

驚きさわぐよしの詞ときこゆ」といへり。

落合直文(新編假名遣)も「語意より考ふるに、弱し

に通じてわの假名なること疑なし」と定め、

文部省編輯寮の説(語彙)も同じ様に聞えたり。いわく

に、「たよわきより出てつよからぬ心に驚くをいふ」いわけなきの條に、

「人のいまだ成長せざるほどをいふにてたよわきさまをいふなり」など

注せり。

此の他寺田長興・大石千引の説あり。下なるイハケナシの條に抄録せり。

五 伴 信友

いわけなき

信按『元正紀』

紀に稚をイ

ワケナシとよめり。

編者いふ、『元正紀』三年十月辛丑の條に「年齒猶稚」とあり。されど流布本には傍訓なし。

イ

ワケはおどろくやうの詞と聞ゆ。稚をよめるは、兒なきほど、物のわさまへなくて、おどろくべき事にもおどろかであるをいわけなしとも云なるべし。俗にぐわんぜがないと云意也。

(増補語林倭訓栞)

六 村田春海

いわけなき

幼稚を云。

これを伊を發語

として、「別ちなき義也」と云説あれどしからず。『源氏物語』に「こゝろなげにいわけて聞ゆる」又「夢にもいわけたる御ふるまひあらばこそ」なども有て、いわけとのみもいへれば、なきは無字の義にはあらで、添いふ詞也。あらしをあらけなき、はしたをはしたなきなど云類のなき也。

また『雄略紀』に駭惋の字をイホケアホテ、と有。是も同語と見えたり。又『古今六帖』に「いわけなきまで戀かかりけり」編者いふ、卷の三に「逢事のかたよせにするあみのめにいわけなきまで戀かよりぬる」とあり。と有も駭字の意ならむか。

さて此假字正しき證はしられねど、『紀』の舊訓又『釋日本紀』の秘訓にもイホケと有。こは『私記』などに、眞名に書たるを寫せるか共覺ゆれば、暫是に寄て和の假字とす。今心見に此詞をとけば、伊は字比の約めにて、稚の義ひうをいと云事例有。上に出。○編者いふ、いしの條に「神代紀に國稚地稚と有をクニイシツチイシと訓り。ウヒの反イなれば、うひしの義にて、稚をイシと訓る成べし」とあり。和氣は若の義にて、うひわかさと云詞ならむか。駭字をイワケと讀るも、をさなき人は物におどろき安き物なれば、おどろく事をいわけと云にやとも思はる。されど此詞さだかにはいひ難し。猶正しき證を得るを待べし。又『紀』に喘息の字をイワケと訓るは、おどろくをイワケと云より、又轉じたる訓と見ゆ。イワケは息涌イキラクの義か。

イキをイとのみいへる事も、ワクをワケと通はしいへる事も、古語多し。喘息の字をよめるが此語の本義成べし。さて物におどろく時は、いきづかひなどもあらげに成物故、驚く事にもいひ、又をさなき人は心しづまらで、いきづかひなどしづかならねば、をさなき事をもしかいへる也。

(假字拾要)

岡本保孝(古言梯補遺) 物集高見(かなづかひ教科書) 飯田武郷(日本書紀通釋)等、いづれも『日本書紀』の傍訓によりて、ワの假名遣とし、

石川雅望の『雅言集覽』近藤真琴の『ことばのその』小田清雄の『國語かなづかひ早學』またワの假名遣とせり。

二 イハケナシ

松永貞徳 『和句解』一の三丁に「いはけなしは、言イヒツケ分ナシな

いわけなし(幼稚)

しなり。分別淺くて物をいふほどかぬ故に、いとけなしとも同事也」とあり。

寺田長興の『太津可豆衛』の説、これによれるなるべし。同じく言別無の義とあり。但し假名はイワケナシと書せり。按ふに貞徳の説は、ヒワの反ハにて、イハケナシなりとせるか。或は『和句解』を通覽するに、ハとワとを明らかに混用したれば、いはけなしとあれど、實はいわけなしなるべきか。若し後者とせばこれまたワの一假名遣説なるべきなり。大石千引の『言元梯』にも「イワケナシ イハケナシ 言分ナシ」と注せり。

行阿(假名文字遣 三二丁 四三丁) 橘 成員(倭字古今通例全書) 契沖(和字正濫鈔) 賀茂真淵(源氏物語新釋 第五の四 四四五頁) 山岡俊明(類聚名物考 第四册の 三二一頁) 本居宣長(御國詞活用抄 第七) 鈴木 脰(雅語譯解) 清水濱臣(語林類葉) 中島廣足(増補雅言集覽) 萩原廣道(源氏物

語評釋一(一) 佐藤誠實(語學指南八丁)等もハの假名とせり。

大槻文彦の『言海』にはイハケナシ・イワケナシの兩條に擧げたり。されどイワケナシの條に「此語弱しに通じて此假名遣なりといふ説あれどいかゞ」と注せるを見れば、ハの假名遣説に傾けるが如し。

いわたおび(岩田帯)

一 ユハタオビ

一 榎島昭武

ユハタオビ

婦人妊帯。

編者いふ、纈は、『倭名類聚抄』調度部、細工具、革の條下に、

「纈讀「由波太」と見え狩谷望之の箋注に、「今俗紋染是也」といへり。

(合類大節用集六下の五五丁)

『吳竹集』卷一の「いはた帯 纈帯と書。女のはら

みてはだにする帯なり。五月といふに結ぶなり。互「しれぬはだへに結ぶいはた帯心づくしの月をこそまて」帯をむすびてより、産月を待て心をつくす也。

編者いふ、この歌萬葉集に見えず。

「逢事はかた結するわぎもこがいはた

の紐をいつかとかくべき」

編者いふ、この歌は續後拾遺集、戀二に見えたる某後の歌なり但し四句ゆは

たのひもよ

「心ぐるしく月をこそまて」といふ句に、「人

しれずはだへに結ぶいはた帯」讀人不知」とあり。

いはたと記したれど、纈の古き假名遣はユハタならざるべからず。

二 貝原好古の『大和事始』益軒全集卷一の七一九頁に結肌帯と記し。伊

勢貞丈の『貞丈雜記』二下丁に「妊婦の腹帯をゆはだ帯

と云。結肌帯といふ事を略して、ゆはだ帯と云也」といひ、

大石千引も『言元梯』五七丁に結肌帯の義とし。『關秘録』

卷六の「懐妊して五月めに帯をすることを結肌帯と

云。此事『産衣』と云書にあり」といへり。

また岡本保孝の『難波江』百家説林、續編 下一の六二〇頁に「先師清水先

生濱臣いはく、基俊の歌、腹帯の事とはみえず。編者いふ、基俊の歌、

吳竹集の條に云へり。くしりぞめのひもなるべし。『顯季集』に「年久

にゆはたの帯をくりしてて神にぞまつる妹にあはん爲」と

ある。これもたゞくしりぞめのちびなり。孝云「堀河百首」祝、顯季「君が爲

ゆはたのきぬをとりしてて神をぞまつる萬代までに」家集にも入れたり。「ゆはたのきぬ」とよめるお

なじかるべし。腹帯にいふは、ユヒハタの意なるべし。い

はた帯は後の轉語ならんといへり」とあるは結肌（ユヒハタ）の意な

るべきか。或は、布帛を古くハタといへば、腹を結ぶ布帛の

意なるべきか。明ならず。

二 ユハタオビ・イハタオビ

一 谷川士清

ゆはたおび。いはたおびとも見ゆ。懷妊

五月に帶するをいへり。齋肌（ユヒハタ）の義なるべし。鳥羽院の比よ

り見えて、『東鑑』にも五月着帶の事を載たり。『續後拾遺

いわたおび（岩田帶）

集』に「逢事はかたむすびなる吾妹子がゆはたの紐よいつ
かとかべき」

いはたおび 齋機帶（ユヒハタ）の義成べし。伊勢安濃郡にイハタと

いふ所あり。こゝは太神宮のいはた織ける道具をととのへ

て出す所なるよしいへり。……又ゆはたおびともいふ。ゆ

の部に見えたり。

（倭訓栞）

物集高見は齋肌帶の説に従ひ、『日本大辭林』の部
ゆの部の兩條に出せり。

二 大槻文彦

「ゆはたおび 結肌帶。懷妊して五箇月

に、腹に締むる布。……堅固を祝して岩田帶などともい

ふ」「いはたおび 岩田帶。ゆはたおびを見よ」

（言海）

落合直文が『ことばの泉』にも「ゆはたおび 結

肌帶」「いはたおび 岩田帶」と兩條に出せり。

うず(渦)

一 ウヅ

一 楫取魚彦

『萬葉集』卷十五に、「これやこの名にお
ふ鳴門の宇頭之保に玉藻かるとふあまをとめども」とあ
る宇頭之保を證として『古言梯』にヅの假名とせり。

『俚言集覽』

文部省編輯寮(語彙)

物集高見(日本

大辭林)等の説また同じ。

さて『萬葉集』なる宇頭之保を油潮の意に解したる

は、はやく藤原範兼の『和歌童蒙抄』(國文注釋全書本

四二頁)に「うづしほとは、しほのうづまきたるを云

ふ」と見え、谷川士清(倭訓栞) 田中延香(古言梯拾遺)

大槻文彦(言海)等いづれも同説なり。

本居宣長は『古事記傳』

全集第三の
二〇一〇頁

にウヅはウヅマサ

(太秦)のウヅに同じとて、高き潮の意に解し、橘 千蔭

(萬葉集略解) 鹿持雅澄(萬葉集古義) 此の説によれ

り。

契沖は『代匠記』に珍鹽の意とし、世にまれなるめ

づらしき鹽と解せり。

二 谷川士清

うづ

渦をよめり。白水の義なるべし。

うづまくとも歌によめり。盤渦也といへり。

(倭訓栞)

三 或人の説

ウヅと云ことは、ウは上の義。ヅは積ム

の義。ウヅム・ウヅマクも同類の語なり。ヅの一言を積る

義とする例は、ツム・ツメの類。下の一言ム・メ・モは動きはた

らく詞なればなり。これは誰の説にか。過し年、心覺えに

記しおきたるものゝ中にありしなり。

(海録一九の二八丁)

四 敷田年治

うづ 渦 『古玉篇』『和玉篇』等に「渦ウ
ヅ」と注せり。空水の中略也。水勢の烈しき所は、凹ナカクボにな
れば也。『播磨風土記』楫保郡宇頭川條に、「有ウヅ紋水之淵フチ」
故號イラウヅガヘトニ宇頭川ニ

(音韻啓蒙下の五〇丁)

二 ウズ

橘 成員の『倭字古今通例全書』に「うず 洄」 契
沖の『和字正濫鈔』加茂季鷹の『正誤かなつかひ』に「渦
うず」と注し、

大森惟中の『新式音訓かなづかひ教科書』には、「うづ
渦。言海には、ヅの部に收められたれど、黒川眞頼
氏の考に従ひて、ウズの假字とし、此に出す」といへり。

うずい (蹠)

うずい(蹠) うずくまる(蹲)

ウヅキ

一 谷川士清 『倭訓栞』に「ウヅクマリ居也 『論語』
に夷俟ウツキと見えたり」といへり。大槻文彦の説(言海)もた
同じ。

二 『俚言集覽』愚案 「愚案、廣隆又太秦をウヅマサと

讀り。然ればウヅキは隆居ウツキの義也。太は泰と同じ事にて、
驕泰と連用し、オゴソカと訓めれば、うづ高き意也。因て
『論語』の夷俟をウツキと義訓したる也」といへり。

三 物集高見 『日本大辭林』にウツキと清音に讀み、

「俯居、うつぶさゐるといふ」とて『遊仙窟』に、「端坐ウツキニ」
とあるを引けり。落合直文(詞の泉)も俯居ウツキの義とせり。

うずくまる (蹲)

一 ウヅクマル

一 松永貞徳

蹲踞 うづくまる。打かしてまるか。また水のうづのごとく、わきへはびこらず、中くぼに畏か。…またひざをかゝめてかしてまれば、足屈していたみうづくか。

(和句解 三の一八丁)

二 楫取魚彦

うづくまる 宇豆は、『日本紀』禹豆麻佐。『祝詞』宇豆乃幣帛など云宇豆に同。『古事記』今本に宇須受麻里とあるは誤字也。

(古言梯)

賀茂真淵の『祝詞考』全集第二の一六一七頁に「集侍の訓…」

宇其那波里波牟倍留と訓べし。宇其那波里は、宇都久

萬里といふ言の都を略さ、久を其に轉じたるにて、宇都

虫・禹都萬佐などの宇都に同じ」とあるに據れる説な

るべし。また『古事記傳』全集第三の二四三二頁によれば、宇須受麻里の受を豆の誤といへるも賀茂真淵の説なり。

山岡俊明の『類聚名物考』第四冊の一七二頁には、ウヅクマル

はウズスマルの轉とし、村田春海の『假字拾要』一三に

も、『古事記』に宇須受麻里と有。『古言梯』うづくま

りの下に、此『古事記』の須を誤字也といへるはひが

こと也。古言に須と都は通ふ例有。玉だすきと云に次

字を書、悠紀主基の主基も、次字の意なれば、『日本紀』

に次と書り。さればウスツマリにて、ウヅクマリと通

ふ事しるし」といへり。

三 谷川士清

うづくまる 蹲踞をいふ。…うづみく

まりにて、埋隱の義成べし。

(倭訓栞)

『俚言集覽』に士清の説をあげ、「愚按、ウヅを埋の

義となす信がたし」といへり。

四 寺田長興

うづくまる 蹲を訓り。『古言梯』に『古事記』に宇須受麻里と有は誤字也といへり。さもあるべし。されど宇豆は、禹豆麻佐又宇豆乃幣帛などいふ宇豆に同じといへるは非也。そもく、禹豆麻佐のかたは、珍ウツにて希布意也。又宇豆乃幣帛のかたは、嚴イにかよひて、宇頭多加などの宇豆におなじ。此の宇豆は渦卷などいひて、水のしゞまるを云ウツ、又『論語』てふ書に躓をウツキとある宇豆の意也。よくせずばまがふべし。今頭垂をウツ向といふをも思ふべし。

(太津可豆衛)

此の他大石千引(言元梯)は「項衝屈」の約とし、大

槻文彦(言海)は、「堆隠ウツクマるの意か」「仰屈ウツクマるの約か」

といひ、

橘 成員(倭字古今通例全書) 契沖(和字正濫鈔)

市岡猛彦(雅言假字格) 春登(假字音便撮要) 萩原廣

うづくまる(蹲)

道(心の種) 文部省編輯寮(語彙) 佐藤誠實(語學指南 三の二) 物集高見(日本大辭林) 落合直文(詞の泉) 笹村良昌(假字の栞)等みなヅの假名とせり。

二 ウズクマル

清水濱臣

『増補古言梯標註』に「濱臣云、うづくま

るの證たしかならず。宇豆麻佐・宇豆の幣帛は證となしがたからん。おのれは『古事記』にしたがひて宇須受麻里編者いふ、宇須久麻里と書くべきを、宇須受麻里といへるは、過失なるべし。とかくまくおぼゆ。外にも證あるべし」
編者いふ、本居宣長(全集本古事記傳二四三二頁) 橘 守部(稜威言別八の五六丁)は宇須受麻理の語源を群統と説き。ウツクマル(蹲踞)とは別の語とせり。

小田清雄の『國語かなつかひ早學』にもズのの假名遣とせり。

うちわ(内輪) うとう(善知鳥)

うちわ(内輪)

一 ウチワ

谷川士清 うちわ 俗に親家をいふ。内曲の義也。

曲は部曲をいへり。

(倭訓栞)

大槻文彦も『言海』に「うちわ 内曲。(一)家族・親

族の内の事。(二)外人に示さぬこと。うちうち。ないな

い。(三)うちば。ひかへめ」と注せり。

落合直文の『詞の泉』にもワの假名遣とし内輪と記せり。

二 ウチハ

『俚言集覽』 内輪。近族を云。俗に内輪字を用れど

も、實は内端の義にて、端の假字を口語に和と呼べるなるべし。端は邊の義なり。

内端。端、濁也。外よりする邊をソトバと云。内よりする邊をウチバと云。又謙遜謹言なるをウチバなる人と云。

物集高見の『日本大辭林』にも「うちわ 内端。うち。またおもてだぬをいふ」といへり。

『言海』『詞の泉』ともに、前にいへる如く、ワの假名遣説なるが、「物事を扣目ヒカヘメにすること」をいふ意のうちわといへる語には、内端の字を書し、ウチバの假名遣として別に出せり。

うとう(善知鳥)

一 ウタウ

一件 信友

『新撰字鏡』 鷹。

其月反。白鷹。鳥刀。○刀の字、韻學記にてはタウの音な

れども、古事記をはじめ、トの假字に用たれば、トウの音にも用たる也。又ウトとよむべし。ウトウは訛言歟。……

『東鑑』 十八丁 「於外濱與糠部間有多字末井之梯

以二件山一爲二城郭」 とある有多字、地名也。假字ウタウ也。

編者いふ、小山田與清が松屋筆記(國書刊行會本第二の五四頁)に、『要目集成』に「此ノ假名誤レリ。於外濱與糠部間有多字末井之梯ト讀ベシ。津輕ノ鎮、青森ノ東六里許濱手ノ山際、野内安佐虫ノ間道ノ絶タル所アリ。其所ニ板ヲ渡シ運路トス。夫ヲ今モタウマキノ梯ト云。……」と見えたれど、此説いかゞあらん。有多字末井の梯を俗言に省て多字末井といふらんも知べからず。有多字は地名に例あれば必有多字末井之梯なるべくおぼゆ。回國雜記に「武藏河越の鳥頭坂あり」といへり。

『運歩集』 善知鳥惡知鳥ウダウヤカカ觀世カク 虛同八姿ウダウヤカカ金春方ニ書レ之。自異國カク化而成レ鳥也。依レ之如レ此書也。森翁一覽説也。

『夫木抄』 定家ウダウヤカカ 「みちのくのそとの濱なるよぶことりな

くなるこゑはうとふやすかた」
松葉集に夫木抄を引て此歌を載たり。普通本の夫木には

脱たり。○編者いふ、小山田與清の松屋筆記(國書刊行會本第二の五二頁)に、「この歌寛永十六年の、鱧重常が春雨抄(六の上卷)に引て、夫木の歌とす。されど余、契沖法師が校本、村田春海翁家の古寫本、屋代弘賢所藏の古寫本等を按合せるに、いづれの本にも見えざればおぼつかなし。萬治三年刊行の宗惠『松葉集』(六の卷)寛文十二年の高野氏直が和歌名所追考(百十一の卷)延寶五年刊行の類葉集(五の卷)寶永二年刊本の陸奥名所寄(濱部)

うとう(善知鳥)

などにも、夫木の歌とて載たるは、春雨抄の誤をうけたる也。此歌、古歌なるを、謠詞にとりつと見ゆれど未その出處を見ず」といへり。

『回國雜記』 河越といへる所にいたり云々。歌に「うと

ふ坂こえてくるしき行末をやすかたとなく鳥の音哉」

『書言字考』 鳩の字をもよめり。やすかたの諺に似たり。

木曾路、御嶽と細久手の間にウトウ村あり。善知鳥と書。

ウトウ坂とも云ふ坂路もあり。

按に『字鏡』又『東鑑』等によりてウタウと書べし。刀

の字音タウ也。刀をトの假字に用ふるは格別なり。

(動植名彙 全集卷五の四三八頁)

田中頼庸、同書に附記して、『天治本字鏡』鸞鷲鸞

三同。金據反、去焉。鷹鷲二同。其月反、入。(已上字

焉)『慶長本字鏡』其月反、白鷹鳥、力良須。鷲、余據、鷹、

力良須。とあれば宇多字の證とする附會なり」とい

へり。

二 小山田與清

善知鳥は鷲の種類也。宇多字といふ

は、母鳥の鳴聲。ヤスカタは雛の鳴聲なることは、「なくな
るこゑはうたうやすかた」とよめるにて知るべし。異名よ
な鳥といふ。善知鳥の字面は謠詞に始て見ゆ。沙鳥は沙中
に穴して子を生ゆるなるべし。鳩の字はた同義也。松前の
方言にツナギといふは、一鳥捕らるれば衆鳥跡をつなぎて
悲鳴するゆるにや。蝦夷人がウトツプとよぶは、皇國人が
ウトウといふをよこなまりたる也。

『奥羽觀迹聞老志』

三の卷
土産上

に烏鶯ウツウツウの字を用たるは烏童ウツウツウな

どに据て作り出たるなるべし。編者いふ、本草啓蒙、四十三の卷禽
之一(三丁)に異名を烏童と記せ

假字は決がたけれど、しばらく『新撰字鏡』

編者いふ、此の
前文に『新撰字

鏡、鳥部に「鶯、二字豆支。又云太守。云云」按に異本鶯作鶯。字作守。
さては、又云、太守にや。外の例を考に、又云の云の字、用例たがひたれば誤字
なるべし。字の字相似たれば字太守にや。又云字もウとも訓るべし。又類聚名
義抄、鳥部に「鶯、音嘲ツキカヤクキ」とあるに据ば、字音もて太守とよべる
にや」と『吾妻鏡』に従て字多字と書べし。又地名に善知鳥

とも安瀉ヤスカタともいふは、此鳥の名にとりあはせたる而已にて

本別義なるべし。山の出崎などをウタウといふを編者いふ、
下なる瀧澤
解の説にウツウ
明なり。烏頭と書は鳥の頭の貌よりおもひよれるなるべけれ
ど、これはた善知鳥ウタウと歟鳥太守ウタウと歟書ざれば假名たがへり
『類聚名義抄』二の卷口部に「嗟 ウタフ」と有。編者いふ、
下なる瀧澤
解の説の條
参照すべし。

(松屋筆記國書刊行會本第二の五七頁)

二 ウタフ

榎本其角

烏頭善知鳥ともに不審の字也。東奥の

商人船にて松前へ渡る人のいへるは、蝦夷近き村里島々の
獵師ども呼子鳥の笛などの類、鳩吹手合などやうに、品く
聲を似せて鳥を打をさして、ウタフくとよぶ也。打追の
心成べし。それをやし立る烈士のものをヤスカタと云
也。ウタフは親、ヤスカタは子にて烈士。

(類柑文集俳諧文庫第九編の五七頁)

谷川士清(倭訓栞) 伊勢貞丈(安齋隨筆 故實叢書本卷二 九の九三一頁)

『俚言集覽』等またウタフと書せり。

三 ウトウ

敷田年治

うとう 善知鳥也。俗に鶴字をよめり。

『新撰字鏡』に鶴太字と注たるを思ふに、朱鷺より轉じたるものにて、海朱鷺と云義也。此鳥津輕の安瀉浦邊に多し。故にあこぎの謠曲に出たる人名をとりて、ウトフヤスカタなど云り。猶『國典字徵』鳥の拾遺鶴字に委注せり。

(音韻啓蒙下の四六丁)

大槻文彦(言海) 物集高見(日本大辭林) 落合直文 (ことばの泉) 笹村良昌(假字の栞) 等ウトウとせり。

四 ウトフ

瀧澤 解

善知鳥は出崎といふがごとし。陸奥の方

うとう(善知鳥)

言に、海濱の出崎をウトフといふ。外濱なる水鳥に、背はたくて眼下肉つきの處高く出たるあり。故にこれをもウトフといふ。彼鳥の背に喩て、出崎をウトフといふか、出崎に比て彼鳥をウトフといふ歟、何にまれ、さし出たる處をウトフといふは東國の方言なり。

美濃の御嶽驛の東に「ウトフ村」あり。信濃に「ウトフ阪」あり。いまは鳥頭と書。これらみなさし出たる處なればウトフといふなるべし。

(京雜の記 百家説林續編中の二〇二七頁)

小山田與清は『松屋筆記』國書刊行會本 第二の五五頁に「此出崎の

地をウトフといへる説さもやとおぼゆ。『類聚名義抄』に「嘘 ムタフ」とよめるは、口偏の字なれば嘘義にや、旁の崖に据れば、涯岸の所とすべし。又背の貌によりてムタフといふよしいへるは、「なくなるこゑはうたうやすかた」とよめるにも心付ざる僻説也。……

古、物名をおほするは、打見打聞のさまによれるにて、生類は捕得て後、其形を按檢して名づけ、草木は伐取て後、其色を分別して名付るなど、物遠き事にはあらず。カリくくと鳴を聞て、雁とよび、丈高く生出たるを見て竹とよぶ類也』といへり。

なほウトフと書せるは寺島良安の『和漢三才圖會』

活版本六に『善知鳥。俗云宇止布』とみえ槇島昭武の

『合類大節用集』五の三貝原篤信の『大和本草』卷一五岡

本保孝の『言靈』三の一またウトフとあり。

うわさ(噂)

ウハサ

一 谷川士清の『倭訓栞』に『うはさ 噂をよめり。』詩』

の小注に聚談也と見えたり。或は背語をよみ、又風聲をも譯せり。表様の義也といへり』と記せり。

大槻文彦も『言海』に『うはさ 噂。表様の略か』といへり。

二 大石千引の『言元梯』には『噂 ウハサ 上夫 ウハツ』と注せり。

うわばみ(蟒蛇)

一 ウハバミ

一 荻生徂徠

蟒をウハバミ蝮をクチバミといふ。ハミ

はヘミなり。ヘミはヘビなり。ウハは大なり。クチバミは赤口・黒口とて二種有。赤口バミ・黒口バミといふ事を略せるなるべし。

(南留別志卷三の九丁)

二 谷川士清

うはばみ 蟒蛇をいふ也。耳ありといへり。ウハは上の義。大をいふ。ハミは蝮也。

(倭訓栞)

大槻文彦の『言海』には「うはばみ 蟒蛇。上蛇ウハヘミの轉か」といへり。

二 ウワバミ

平野必大の『本朝食鑑』卷の一二 蛇の條、および『和漢三才圖會』活版本六七八頁 共に宇和波美と記せり。

え・えな (胞衣)

一 エ・エナ

一 谷川士清 『日本書紀通證』卷二の二二丁に「今按『舊事

紀』曰「兄生エトシテムト淡路洲。胞與兄訓同。盖以胎中先有也」といへり。

村田春海の『假字拾要』一五丁に、「えな 胞。『舊事

紀』兄生淡路洲とあり」此は、士清の説と同じ意にて書けるか。或は、『日本書紀』に「以淡路洲爲

胞」とあれば、『舊事記』なる兄は胞の借字、兄の訓は

エなれば、胞の假名もエにして、えなの假名また同じとの意なるか詳ならざれども、『舊事記』を證として、エの假名遣とせるが如し。

大槻文彦の『言海』また「え えなに同じ」とて、

『舊事紀』の文を引きたり。

黒川春村の『碩鼠漫筆』九の二八丁に士清の説をあげて、

「いたく失考なり。こは假字こそは當りたれ。『舊事紀』の文を熟見るに、兄は先の字の寫誤なるべく、「先生淡路洲」と訓むべきなるべし。さるは前文にも、「先

産^ニ生淡路州「爲^レ胞」とあるを見てしるべし」といへり。

二 大石千引

胞^エ衣^エ

(言元梯)

三 橘 守部

爲^レ胞。哀^{エナ}那^ナは被^レ育^{ヤシナハ}幅^ハの義なるべし。

哀は夜行の活用。那は錦綾を幾^{イケン}巾と云^{フン}巾の通音也。

(稜威道別 三の四三丁)

四 黒川春村

此假字、實に徴なければ、これを慥に決め

むにはまづ胞の名義を考ふべし。さて試みに稽ふるに、胞

は家^{イヘ}と同義にて、伊倍^{イヘ}の約め、衣^エの假字なるべし。こはともに阿行の伊

衣なり。也行の以延と混ふべからず。

抑家を伊倍と呼ぶは、雨露を凌ぎ汚穢を避くる料にて、必

齋^{イミ}隔の義ならむを、中略せし語なれば、胞も亦母の胎内に

あるほど、其身を覆ひ包めるさまの全く家とひとしき事

知るべし。むげに近俗の語^{コトバ}ながら、鏡の器を、加^カ々^ヤ美^ミ乃^ノ衣^エと

呼び、宮に收めたる酒樽を衣^エ陀^ダ留^ルと稱^イふも、鏡の家^イ家^イ樽^イに

て、ちのづから同語なるべし。かゝれば胞の假字は、阿行の衣にて、『書紀』の傍^{カマ}假^カ字^ナには従ひ難きものなり。……………

さて此胞を衣^エ奈^ナとも呼ぶは、『書紀』の傍^{カマ}假^カ字^ナよりはじ

めて、『類聚名義鈔』『色葉字類鈔』等にも見ゆれば、頗る古

き事なり。但此奈^ナを副て呼ぶも、更に別義のあるには非ず。

凡て舌より出る音^{コエ}は、奈^ナは舌^舌音^音也。口中に遍満する勢ひあるが故

に、諸語の下に副へて呼ぶ例多し。

(碩鼠漫筆九の二八丁)

二 エナ

林 道春の『多識編』^{五の四丁に}「人胞。比登乃惠那。胞衣

水。惠那美豆」

三 未定

契沖の『和字正濫鈔』^{四の一丁に}「胞 え。假名未考。俗

にはエナといへり』

えずく(嘔吐)

一 エヅク

一 谷川士清

ゑづく 嘔逆をいふ。餌衝の義なり。尾

張の俗エタキといひ、伊勢の俗オタキともいふ。音通ぜり。

(倭訓 榮)

平田篤胤も『古史本辭經』三の三に「士清の説の如

し』といひ大槻文彦の『言海』にも「ゑづく 嘔吐。

餌衝の義と云』と注せり。

二 小山田與清

ゑづく 『躰源抄』四卷十五笙物語の條

に、「或記云、筑前守兼俊、殿上ニ笙フクベキニヨリ、昇殿

ヲユルサルベキヨシサダアリケリ。先試マシ／＼ケル日、

えずく(嘔吐)

キサキエヲ給テ吹セラレケルニ、用心ナクシテフキ出シケ
ルホドニ、管ノ中ニヒラクモノアリケルヲ、ノンドヘノミ入
テケリ。ムセテエツキマドヒケルホドニ、君モ臣モ笑セ給
テハラワタヲタチケリ。オホキニ嗚呼ヲ表シテ昇殿ノサダ
モトマリニケリ云々」

按ニエヅキマドヒといふは、『新撰字鏡』十五口部に

「嗛。詩伊反。出氣息。心呻吟也。惠奈久。云々」 また、

「嗛。普利反。喘息聲。惠奈支須。云々」 また八十五連字

部に、「嗛呻。暢五體而息。心之貞。乃比須、又惠奈久。云

々」などある。惠奈支と通ひてきこゆ。後世エタキスルなど

いふも同語なるべし。編者いふ、頭書に、『續教訓抄』或記之卷一丁オ、

同、引出物之卷四丁オに、ツバキエヅラヒヲカシクシ云々」とあり。

(松屋筆記 國書刊行會本第三の八八頁)

堀秀成の『假名本義考』にも「ゑづく 吐 嗛のエ

に同じ。エといへるは聲にて、ツクは衝にて下より衝

上る意也」といへり。

三 『俚言集覽』 愚案

えづく 愚按、『神代紀』吐逆を

タクリと訓れば、エタキは噓手繰にて、エツと口より吐事なるべし。噓は惠の假字なり。惠は王行なれば、俗言も呼多久の假字也。於多久にはあらず。

清水濱臣が『語林類葉』にエの假名とし、『今昔物

語』^{二〇の三四丁}なる「大キナル骨淨覺カ咽ニ立テエツク」

ト吐逆シケル程ニ骨不出ケレハ遂ニ死ニケリ」といへる例をのみあげたり。同意見なるべきか。

四 敷田年治

えづき 噓。『禮記』内則に「不_ニ敢_テ

噓^{カラエツキ}噓^{カラエツキ}咳^{カラエツキ}」と有は乾吐也。『大同類聚方』一に「惠^{エツ}豆

岐美味堂理」とあるに従ふべし。

(音韻啓蒙 下の五二丁)

物集高見の『日本大辭林』落合直文の『ことばの泉』

もエの假名遣とせり。

二 エツク

松永貞徳

嘔。えづく。えい〜と云聲か。ツクは上

へつさ上るか。

(和句解 四の二四丁)

橘 成員の『倭字古今通例全書』にも エツクの假

名遣とし、寺島良安も『和漢三才圖會』^{活版本二に、四四頁}「既

歐有_レ聲無_レ物名ニ乾嘔_一加良江豆木」と注し、本居宣長の

『御國詞活用抄』^{第一にもえづくとあり。}

えせ(えせ者・えせ侍の類)

一 エセ

一 『俚言集覽』 愚案

えせ 愚按、假字姑^{シズラク}『正濫』に従

ふ。『袋草紙』『伊勢物語』名義を釋して、僻と云意也といへり。然れば僻はイセと訓るなり。イとエと通ず。……さて僻をイセといふは、偏陋は狭き義なれば、イセといふ也。狭はイセともよむべし。古言にイ文字を發聲に置いていふもの多し。イとエとは阿行にて通ず。エの假字にあらず。『運歩色葉集』に「惡 エセタリ」此は義訓也。

二 小山田與清

『増補古言梯標註』 えしもの の條に
えせは『常陸風土記』に「荒賊俗阿良夫流要斯母乃」とある要斯におなじきよしを注せり。

大槻文彦が『言海』の説また同じ。

三 敷田年治

えせ云々 『源氏』葵に「ゑせすりやうのむすめ」『宇治拾遺』十に「ゑせ牛」『枕冊子』一に「ゑせもの」『同』六に「ゑせおや」『四季物語』及『十訓抄』九に「ゑせたるけだ物」『義經記』に「ゑせ方人」『建武閒記』に「えせ小鷹」など猶多かり。何れも思ひ

えせ(えせ者・えせ侍の類)

くの假名を書きおきて、治定せざりしかど、義はかつく聞えたり。『運歩色葉抄』に惡字をエセタリと注せり。是はいづれも是と云にむかへたる語なれば、云もてゆかば惡と云に當るめれど、只そしりたる意に聞えたり。

然て假名は、安行の衣にて、『永久次郎百首』に「いせならびひがことぞとや思はまし大和なるてふみまさかの池」とあり。エセはイセの轉じたるなり。

(音韻啓蒙 下の四六丁)

契沖(和字正濫鈔) 加茂季鷹(正誤かなつかひ) 石川雅望(雅言集覽) 清水濱臣(語林類葉) 萩原廣道(心の種) 近藤眞琴(ことばのその) 物集高見(日本大辭林) 落合直文(詞の泉) いづれもエの假名遣とせり。

二 エセ

橘 成員の『倭字古今通例全書』に「ゑせもの 曲者」と注し、谷川士清の『倭訓栞』に「ゑせ ゑせい ゑせ笑 ゑせ者などいへり。『源氏』に「ゑせ受領」『枕草紙』に「ゑせざいはひゑせ牛ゑせかたち」『無名鈔』に「ゑせ歌」『職人歌合』に「ゑせ采 ゑせ木」などもいへりといへり。

三 未定

山岡俊明の『類聚名物考』四冊の三三八頁に「えせ 假名未考へねどもまづこゝに入たり」と注し。『同書』同巻の五、六六頁ゑの部に、更にゑせとあげたり。
岡本保孝も、『古言梯補遺』に「假字未詳」と注せり。

えぞ(蝦夷)

エゾ

一 貝原篤信

エビス

エゾ

蝦夷の人は。其ひげ長くして、ゑびの

如し。故にエミジと云。 ビとミと通ず。 シの字はやすめ字なるべし。 エミジを轉じて、夷狄をすべてエビスと云。 ミ

とビと通じ、シとスと通ず。 エゾと云もエミジの畧語なる

べし。 ジとゾと通ず。

編者いふ、えみしは日本書紀に愛瀾詩。えびすは天治本新撰字鏡に衣比須とみえて、

エの假名なり又えびの假名のエなること云ふまでもなし。然ればエビス・エミジとあれど、語源の解釋によるときは、エの假名遺説なりといふべし。

(日本釋名一の四〇丁)

荻生徂徠(南留別志二の)は

二丁)は

『熊襲・えぞ・木曾のそ

は夷狄のことにして、エビス・エミジ・エゾは一語の轉ぜ

るなるべし』といひ、伊勢貞丈(安齋隨筆故實叢書本卷九の三一、二頁)

も、「エビスを中略すればエス也。 スとソと音相通

ゆゑ、エス轉じてエソとなる』といひ、中山信名は

『新編常陸國誌』二丁に延美志の訛なる延牟曾の縮とし、

岡本保孝の『況齋雜話』下の五丁には、『エはエビなど

のエ、ソはクマソなどのソと同じさか詳ならず。エミ

シのシと通韻なり』と記し、楫取魚彦(古言梯)も

『エミシの轉語ならん』といひ、文部省編輯寮(語彙)

大槻文彦(言海)等またエミシの轉語とせり。本居宣長は古事は

記傳(全集第二の一六五〇頁)に「延叙と云は、延美斯と云とは、本より別なる名か、はた是も延美斯を訛れるものか詳ならず」といへり。

二 契沖

『和字正濫要略』五八丁に『えぞ』『新古今』頼

朝卿の歌に「みちのくのいはで忍ぶはえぞしらぬかきつく

してよつぼの石ぶみ」これ陸奥より、えぞをかけて名所を

おもしろくつゞけて、歌のひとふしにせるに、「えぞしらぬ」

といへるにて、假名の證とする也』といへり。和字正濫鈔(四の一丁)に

は。「えぞ」眞名假名共未考」とあり。

三 黒川眞頼

延美志の延美は、忌み避け又忌み悪む意

なり。委しくはば、俗にエエといふ意にて、エエオソロシ

イ・エエコハイ・エエスカナイなど即是なり。其エを活用し

てエミといふ。例へば悪^{ニク}を惡^{クエ}ミ悔^{ナエ}を悔^{ナエ}ミ惱^{ナエ}を惱^{ナエ}ミといふが

ごとし。然して其延美志の志は大人の上略なり。強暴の人

の威力及所爲を、温良の民が畏れて、これを忌み避くるにて

所謂敬して遠ざくるほどのものをば延美志といひ、又一向

に忌みて嫌ひて、度外に措くをも延美志といひ、又延會^{エン}とも

いふ。延會はエエオソロシなどいふ意なり。

(蝦夷人種論全集第四の二二三頁)

此の他松永貞徳が『和句解』四の二丁に『えぞ』『えび

ぞ』と云事か。髯多故也』と注せるも、篤信と同じく蝦

の意とせるが如し。

新井白石(東雅活版本第一冊の一〇二頁) 谷川士清(倭訓栞)また

エの假名とし、漢人の書倭訓栞には「明人興に」「野作」地の圖説」と記せり。

と書せりといへり。

えだつ(役)

エダツ

一 契沖

『萬葉集』「大君の命かしこみかなし妹がたま
くらはなれ欲太知伎奴可母」といへる歌の解に、『ヨダチ

キヌカモは、エとヨと通ずれば、エダチキヌルカモなり。徭
の字役の字をエダチとよめり。軍役に差るるなり。第十六
にも課役をエダチとよめり。或は夜をこめて立て來るとよ
める歟。此は防人などに差れて出とてよめるなるべし』
といへり。

(萬葉集代匠記活版本卷の一四下の一五頁)

二 本居宣長

『古事記傳』全集第三の一九九〇頁に『此爲役之三字
を延陀多世豆と訓べし。……延陀知は役立なり。延は役字の
音には非ず。

本よりの古言なり。……延は充の約りたる言か、詳ならず。陀知は民の

其事に發趣くを云。『萬葉』十四に「於保伎美乃美己等可思

古美可奈之伊毛我多麻久良波奈禮欲太知伎努可母」こは、

延陀知を東言に欲太知と云り。十六二十に課役徵者』と

いひ

同書同第二の一 役病の解に『和名抄』に「疫、衣夜美。一

云度岐乃介、説文云民皆病也」とあり。……『書紀』にも、

疫病・疫疾・疾疫・疫氣などみな延夜美と訓り。又延能夜麻比と訓

處もあり。……さて、然名くる意は、まづ役を延とも延陀知と

も云を、疫病も漢籍に民皆病也と云る如く、人毎に病が、彼

役に差されて立に似たる故なるべし。師は、疫を延と云は、もと字

ある、即是なれば、此の疫病をも、共にカミノイブキと訓べしと云れき。已も始

に思へりしは、役をも疫をも、共に延と云を思へば、もと字音を取れるなり。若

もとよりの古言ならむには。かく同音の字にて同言なるべきに非ずと思へり

しを、後になほよく思へば、然には非ず。共に固りの古言なり。まづ役はおの

づから、字音と同じきなり。凡て此方の古言と、漢字音とおのづからに似たる

も同じきも、稀にはあることなり。然るに、其をも悉く彼を取れるものと思ふ

は中々に』といへり。

鹿持雅澄の『萬葉古義』活版本卷の一に『欲太知伎努

可母^{カモ}は契沖が、えだち來ぬるかもなり。徭役の字をかける、其義なりと云るぞ宜しき。……本居氏云、延太知は延は充^{アテ}の約りたる言か。太知は民の其事に發趣くを云』と記し、

飯田武郷も『日本書紀通釋』^{第二の一}四〇五頁に『延陀知は

役立なり。延は役の音には非ず本よりの古言なり。延は言義詳ならず』といへり。

三 谷川士清

えだち『神武紀』に役をよめり。役發^{セツ}の義。音をめて訓せる也。『萬葉集』に「宮木ひく泉のそまにたつ民」とみゆ。今いふ人足なり。

(倭訓栞)

賀茂真淵が『萬葉考』^{全集第三の二四二四頁}欲太知伎努可母の解

に『或人、ヨダチを徭役の事とするはひがことぞ。此歌、私事ならねば、いと速く催し立せられしよし、上の言にしらせて、さて夜立^{ヨダチ}といふにて、深き嘆あり。又役

えほう(惠方)

を『日本紀』にエダチと訓しは、後世の訓なり。又徭立てふ言も有べからず。古歌に字音なし。東歌には、ことに字音有まじき事上に云がごとし』といへり。前に挙げたる『古事記傳』役病の條に引ける真淵がエヤミの説と合はせ考ふるに、役をエダチといふは古言にあらず、エは字音にて、後世の訓なりといへるには非るか。然らば士清の説と同じ。

大槻文彦が『言海』に『えだつ 役。役^エに立つ義』といへるも、役の字音とせるなるべし。

此の他大石千引は『言元梯』に家出^{エダシ}の義と注せり。

えほう(惠方)

一 エハウ

一 天野信景

『鹽尻』

帝國圖書館五十卷
本三〇の一丁

に『歲德の方を俗

にゑ方といふ、吉方とかくなり。『伊勢守記』寛正六年八月
今出川殿の夫人産の所に見へたり。吉をエとよむ事、住吉
をスミノエとよむと同じ』といへり。吉の假名をエと
せるは誤なり。

山岡俊明の『類聚名物考』

第五册の
一四七頁

に『吉方參 今

俗に正月初て出るに、その歲の吉方の方の神佛へ參詣
る事ならはしとなれり。これ古より有る事にや。『明
月記』寛喜三年正月九日午時許乘車行賢寂之宅
依生氣方今年初出行見孫子之小女歸云々』とい
ひ、

谷川士清も『倭訓栞』に

『えほう

吉方の義。日

吉をヒエといふが如し。吉方は西土の書にも見えたり。
又兄方と書て、陽干の方を歲德のある所とするよ
り出たりといへり』といへり。また

榎島昭武の『合類大節用集』

卷二の
一七丁

に『得方

商賈

謂吉方爲得方』と見え、

『俚言集覽』え方の條に、兄方吉方の説をあげ、『愚
按、年德の德は即エと訓すべし。德者得也。乃義あれ
ば也。得も和訓エにて吉の意なり』といへり。

この他、瀧澤解(俳諧歲時記上卷の
四丁) 物集高見(日
本大辭林) また吉方の義とせり。

二 梅國

客問曰、「歲德神方云恵方何義乎。」

答、

「世人曰恵方實無穩當正字按歲德神方定在甲庚丙
壬、江ノ方更非乙丁己辛癸斗ノ方有歲德神其言可レ知矣
『簞簞』卷一曰歲德神方東宮在甲寅開 西宮在庚申開
南宮在丙巳開 北宮在壬亥子開 編者いふ、甲・丙・戊・庚・壬を陽
德として、歲德のある方なりと
の説は、曆林問答集(經濟雜誌社本羣書類
從第一輯の二九四頁)にも見えたり。

(櫻陰腐談下の二七丁)

『閑田耕筆』

百家説林續編
下一の三頁

に、小西梁山の説とて、『曆

に兄方といふことを、世に恵方と書は、恵をうくる方と

心得たるにや。然らず。甲・丙・庚・壬等の方にあたれば、兄弟の兄なり。甲乙をもて兄弟とするなり。此くりやうは、甲巳歳は甲方寅卯間 乙庚歳は庚方申酉間 丙辛歳は丙方巳午間 丁壬歳は壬方亥子間 戊癸歳は丙方とあるも全く同説なり。また

俊猯子が『青陽唱詠』丁七にも「えほう 年徳、十幹配_レ五 順 輪而陽幹陰幹相合以_二陽幹方_一爲_二年徳在所_一俗名_レ之曰_二惠方_一陽幹とは甲丙戊庚壬也。十幹陰陽配合し、一年の間、萬物を生ずる徳有方とて、年徳ともいふなるべし。惠方とは甲_キ丙_エなどいへるエにて兄方也。エトとは兄弟也。しかれば惠方と書は誤也」とあり。また

『鹽尻』帝國圖書館五十卷 本卷三〇の一三丁に「賢按、……惠方のゑは十幹の内のゑといふ事也。歳徳の方はいづれもきのへ・ひのへ・つちのへ・かのへ・みづのへの方兄_エの方斗用るゆへ

えほう(惠方)

にしかいふ也。きのと・ひのとと弟_トの方は用ひざるゆへ也。例せば甲巳年は東甲_キにあり。寅卯間、丙辛の年は南丙_ヒにあり。己午間と十干ともに兄の方斗を用るゆへ惠方といふなるべし」とあるも同意の説なり。

山本格安の『和言黔驢編』卷二 丁二また兄方の説を是とせり。

二 エハウ

坂 徴 ゑほうは惠方なり。原文にえほうとかなたがへり。

(蜻蛉日記解環國文注釋全書本四〇三頁)

石川雅望も『雅言集覽』に惠方の義とし『蜻蛉日記』中に「いとよきことなり。てんけのゑほうにもまさらんなどわらふくいへば」とあるを引けり。但し假名遣をエホウとせるはいかゞ。方の假名遣はハ

ウならざるべからず。また岡 吉胤も 『假名遣提要』
に『ゑはう 惠方』と注せり。

三 エハウ・エハウ

大槻文彦

『言海』えはうの條に『えはう 吉方。』

歳徳神の條を見よ』 ゑはうの條に『ゑはう 惠方。歳

徳神の條を見よ』とあり。さて歳徳神の條には、『歳徳

神、又歳神、陰陽師の稱する神。曆の上にて其年の大將軍塞^{フサガ}

りの方と相對する方を司る神とす。其塞りといふに對して

明^{アキ}の方ともいふ。百事に福ありとして祭り、これを吉方・惠

方などともいふ』と注せり。

落合直文の『ことばの泉』また吉方・惠方の二義に

解せり。

えぼし(烏帽子)

一 エボシ

一本居宣長

『字音假字用格』全集第四の
九八五頁に『烏帽子の

とき烏の字の假字エを書べし。ヲの通音なればなり』と

いへり。

清水濱臣(『若桂』の附録)宣長の説に従へり。

二 太田 方

烏。漢次音遠、轉音惠。愚按、烏帽子、エ

ボシ。是十四轉の隈と通ずるなり。

編者いふ、なほ黒川春村の説
の中に引ける太田氏の説を參

照す
べし。

(漢吳音徵一五丁)

三 岡本保孝

ゑぼし 烏帽子 『和名抄』冠帽類 「烏帽 烏帽
子俗

爲焉』とみえたり。焉は衣の假字也。烏は古人ヲの假字に

用てウにあらず。後世ウにも用る也。掖齋翁の攷證に、阿

以字衣の通とあれどいかゞ也。烏はウにあらでヲなれば通
とはいひがたくや。本居氏の『字音假字用格』三二「烏帽。
エを書べし。ヲの通音也」といへり。

近ごろ出現したる『新撰字鏡』の真本をみれば、臨時雜

用字部に、「鹽帽絮江牟保字志」○帽原誤増といへるにより、或人友人木村

莊之は、衣の假字にさだむ。しかれども孤證とやいふべき。

『字鏡』たしかなるものとせんにも、源順はうべなはぬ事と
みえて、「俗訛烏爲焉」といへり。さればおのれはエの

假字とさだむ。

(古言梯補遺)

此の他、物集高見の『かなづかひ教科書』にも『ゑ

ぼし』吳音の烏字の假字』落合直文の『新編假名遣』

にも『ゑぼうし』ゑは烏の字音』と注し、

大石千引は『言元梯』に『烏帽子スエガホ 居スエガホ覆シ』と注せ

り。

えぼし(烏帽子)

二 エボシ

一 狩谷望之 『倭名抄』に「烏帽子 俗訛烏作焉。

今按、烏焉或通。見『文選注・玉篇等』とある箋注に「按、

阿以字衣通音。故俗呼烏帽子之烏如衣。非訛烏字爲

焉也。又按、文選注・玉篇不載烏焉通此所言恐誤」

といへり。

(箋注倭名類聚抄 卷四の四丁)

二 黒川春村

『倭名抄』卷十二冠帽類に『兼名苑』云、帽

一名頭衣帽音者。烏帽子、俗訛烏爲焉。今按烏焉或通、見文選注・玉篇等。云々『類聚名義

抄』巾部に「烏帽エンホウ一名頭衣」『伊呂波字類抄』江部に「烏帽子

エホウシ。順按……也。烏俗 訛曰焉。但烏焉二字或通也。」と有どもに依て稽ふるに、此假字

はエホウシと書べし。エは即安行の假字也。焉も安行の音なればなり。さるを近頃の假

字遣の書どもに、烏の通音と見て、エの假字としたるは、恐

らくは失考なるべし。

偕『倭名抄』の分注に、「文選注、烏焉通」と見えたるは

足利學校に傳へたる、『宋版李善五臣文選』金澤文庫の印ありて

平氏政朝臣より、當學校に寄附の由を記し、彼北條家の虎印をも捺たり。のうち、子虛賦なる烏有先生を、

「焉有」とも、亦かさ交へたれば、是をさしていはれしなる

べし。刊本の『六臣註』にも「烏。五臣作焉」とある

を見るべし。玉篇も亦通ずとあれど、今本には所見なし。猶按ふに、『職員令集解』

彈正臺の註に、『劉氏風俗篇』を引て云、「風者氣也。

又戸令、引三同文、無三者字。俗者習也。土地水泉、氣有緩急、聲有高下。

謂之風。烏。戸令、作也。人居此地、習以成性。謂之俗。烏。戸令

云々。略下此二箇の烏も焉字の通なるべし。此他、文中に猶四處あり。本書に就

て見る但し『戸令集解』國守毎一年一巡行にも、同文を引たれ

ど、其條に據れば證としがたし。……又『萬葉集』卷十三三十三

に「吾毛悲烏」ワレモカナシモ又三十三「戀許會増焉」コヒコソマサレ又四十「不見者

乏焉」トモシミ又四十「妻之眼乎欲焉」ツマンメチホリ又四十「月夜清烏」ツキヨキヨシモ……

又五十「月斜烏」ツキカタアキマ又卷十二三十三に「心遮焉」ココロハナギマなど見えたる

るも、烏焉通用の例といふべし。

但し烏は和行の音、焉は阿行の音なるを、是通用せるは何

ぞといふに、烏はもと開口阿行の音にて、合口音に轉りし後

も、猶其はじめは阿行のウなり。まづ其阿行の音なりし證

は、『說文解字』烏字の註に「烏孝鳥也。象形。孔子曰、

烏眇呼也。眇文張目也。玉篇取其助氣。故以爲烏呼。凡烏

之屬、皆从烏。哀都切。臣鉉等曰。今俗作嗚非是。象形。於烏省。古文

見よ。於烏の字體一にして、原音恐らくはオなるが如し。

猶『楊子方言』漢魏叢書本卷八に「虎或謂之於虺。於音烏。今江

魏音。狗寶(東方朔傳、口無毛者狗寶也とあり。)『玉篇』虺大乎切。烏虺即虎也。『廣韻』

虺烏。楚謂虎也。『左傳』作於菟。字彙にも「楚人謂虎爲烏虺」と見えたり。

と見え、又『穆天子傳』卷三に「爰居其野。虎豹爲群。

於鵠與處。於讀曰烏云々。『陸德明莊子郭註音義』に

「於音烏。又」『爾雅音釋』上話に「於烏」『集韻』に「烏

於汪胡切」『廣雅』卷十獸に「於烏」『漢書評林字例』借讀に

「於_鳥」『古今韻會』韻_魚に「於、衣虛切。于也。居也。往

也。古文本作_漚。音鳥。字通_云聲相近也」略下『同』虞模

「於通作_烏。漢書注師古曰。於戲、今讀曰_{烏呼}。或作_烏

虞。音或皆同」また『說文』に「鸚、烏莖切」『玉篇』

に「鸚、於耕切。字彙もまた於京切。音英。」又『玉篇』に「惡、於各切。

不善也。又烏路切。憎_ト也」また『字彙』に「烏、於然

切。音煙」按ずるに、音烏と有べし。煙は也行の音にて不快なり。など、凡て於_烏通用し

て、阿行の音に呼し例なり。但玉篇に「於、央閏切。居也。又、倚乎切、歎辭也」烏は「於乎切。孝鳥也。

又語辭」とある以來は、字體輕重共に分れて、全く兩音とはなれりしなり。通雅卷四十五にも「烏、本家作_於。後以_於爲_助字。而立_烏」といへるが如し。

かゝれば烏字も、烏帽子の時は、其聲軽く呼ばるゝ故に、

焉字に通用して、古人もエの假字を用ひむとぞおぼゆる。

但し猶一説あり。太田全齋翁の『音徴不盡』といへる書

に云「烏、轉音阿。『漢書』司馬相如傳、烏有先生、注、烏、於

何也。愚按、於何反音阿ニテ、惡字ライツクンゾト訓ズルト

同ジ。然レドモ虞韻ニテヲト呼リ。蓋コレ古音ニアラズ。

編者いふ、以上は同書二二丁に出で、以下の説は五一丁に見えたり。又云、惡、轉音烏。『左傳』桓

十六年傳、惡用_レ子矣。注惡安也。『穀梁』定九年傳、惡得_レ之。

注惡於何也。愚按、惡音烏。イツクンゾト訓ルトキ、烏ト同

音ナリ、ヲト呼也。因テ烏字モイツクンゾト呼ナリ。然ニ

孝鳥ノ聲、今現ニアト啼テ、ヲトモヲウトモ啼事ナシ。因テ

思フニ、「惡、安也。惡、於何也」ノ解ニ據ルトキハ、惡平聲。

鶯字三十モ、安字二十モ同位ニテ、ア、發聲也。於何反ハ阿字

ニ歸リテ、是モ同位也。阿廿七轉然レバ古ヘ惡音烏ハ、惡モ烏モ

虞韻ニハアラズ。歌韻ニテ音阿ナル事見ツベシ。「惡安也」

ハ義訓ナレドモ、古ヘノ注ニ音ヲ寓シタルアリ。コレラノ

類ナリ。サテ烏字ハ歎辭ノ方ニ、本音ヲ奪レテ、阿ノ音ハ鶯

字ノ轉音トナレリ。サレバ又是ニテ三十一轉ト十二轉ト通

ズル字アルベキヲ知ルベシ。亡音三十無十二アルヲ以テ證ト

スベシ。亦二十七轉ニ鐸韻三十ヲ借ルヲ思フベシ。惡、於何

也ヲ何ニ於テノ義ニテ、反切ニアラズト思フベケレド、サニ非ズ。義意ハ何ニ於テノ意ニテ、即反切ナリ。是等韻學ニ熟セザレバ、疑ヒヲナス事也」

以上、『音微』○編者のいふ、白井寛蔭の音韻假字用例(二丁の細註)に

烏の古音阿行に屬せる證として、『悉曇藏』卷五(三十一丁)ニ、阿伊烏嚙鷗・阿伊汗愛奧等見エタル烏汗は、字記ニ阿伊嚙鷗トアル嚙ト同音ナルコトシルク、且悉曇ノ諸經釋ニ、汗奧・嚙奧・于奧ナド作レル、コレ古音開ナル證ト云ベシ」といへり。

と見えたる頗委しき心づきにて、是に據て猶ちもへば、烏をエと呼は本音にして、轉音にはあらざりけり。

しか思ひとらるゝゆるは、烏音阿は漢音にて、其吳音即衣なれば、烏帽子の時は此衣の音にて、正しき古音を呼べるにぞ有ける。……かく本音はエなるが故に、焉に通ふも亦理りなりけり。なほ『集韻』に「惡、安也通作^レ烏」と見え、

『真福寺本將門記』に「烏呼哀哉」但し庭槐抄に「不^レ可^レ然事歟、可^レ言^レ烏呼事歟」とあるなどは、ヲコと訓ベシ。不^レ可^レ混。『萬葉集』卷一二十右に「嗚呼兒乃浦」『天

正三年鈔本千金方』に「嗚呼」などあるも、皆歌韻にて呼べるにこそあれ。嗚も烏の同音。呼も亦同じく古音なるべし。かゝれば烏帽子はエ

の假字なる事、一定といふべきにこそ。木村正辭曰、『淮南時則訓』に「天子烏始乘^レ舟。注、烏猶^レ安也」『呂氏春秋』「烏字作^レ焉」これ例の通用也。又『玉篇』「焉安也」『廣韻』「焉何也。烏安也」『正韻』「烏何也」とあるどもをも補ふべしといへる、さる事なり。

さて如此思ひ決めて後に、天治元年鈔本の『新撰字鏡』を獲て披き見れば、其第十二卷臨時雜要字篇云、「保乎憎^{保乎}鹽增

絮江牟保」とあり。按ふに、憎増は共に帽の譌り、鹽帽絮は

烏帽子なるべき事明らけし。さるを鹽は也行の音エムなれ

ば、前説に協ひがたし、然はあれど、こは彼『字彙』の注に

「烏、於然切、音煙」とある類にて、四度計なき當字なめれ

ば、とまれかくまれ妨げなからむ。

(碩鼠漫筆一七八頁)

三 木村正辭

假字はかならずエホシとかくべきなり。

其證は、『真本新撰字鏡』卷十二臨時雜要字部に、「鹽增絮江牟保」

と見え、増は帽字なり。傳寫の誤りなり。按ずるに、帽絮は『史記』絳侯世家に、「太后以^レ胃絮^レ提^レ文帝」注に「應劭曰、陌

額絮也、音灼曰、『巴蜀異物志』謂^レ頭上巾^レ爲^レ胃絮^レとあり。これ此方の帽子の如き物なるから、これを借り用ゐたるなり。鹽の字は、音を借りたるのみ

にて、全く假字がきなり。『類聚名義抄』中に「烏帽エン一名頭衣」とある

る是なり。又『倭名抄』に「帽一名頭衣帽音耄、烏帽子、俗訛、烏作焉。今案、烏焉或

通。見文選玉篇等」とあるも、當時はやく、エンホウシと呼しか

らに、其唱へにつきて、焉ともかけるにて、所謂假字がきな

り。烏・焉字形の似たるより誤りたるにもあらず。また此二字、音義の通ずるによりて、通はしかけるにもあらず。またく當時の假字がきなるべし。

そは新撰字鏡に鹽字をかりたると同意なり。古書にはかゝる例もある事にて、萬葉集に國の官人の第三等の官名の椽字を、其唱へにつきて掬とかけるも、椽・掬字形の似たるより、誤たるにはあらず。掬は音をかりてかけるのみにて、今と同例なり。くはしくは予が萬葉集雜攷に辨へおきたり。

かくて烏帽子をエンホウシと呼は、當時の訛音にて、即轉音

なり。今は音便のンをば省きて、エボシとのみよべり。

然るを、烏はもと『説文』によるに、於と同字なれば、古

音は阿行の格にて、やがてその音を用ゐしなり、といふ説あ

り。こはいとまぎらはしくして、よくせずは誰もしか思ひ

あやまるべき事なるべければ、其よしいさゝか辨へむとす。

そは先皇國にては、古より烏は重音阿行の格、於は輕音阿行

の格として用ゐされたることは誰も知りたる事にて、順朝

えぼし(烏帽子)

臣の比までも、此格に違へる事は、をさくあることなし。

但し烏・於はもと同字にて、同音同義の文字なることは論な

けれど、これを西土にて二字異音としたるも、いと古くより

の事にて、既に『玉篇』に「於、央閩切居也又倚乎切歎辭

也」と見え、央閩切は開轉、阿行の格にて、音オなり。倚乎切は合轉、和行の格にて、音ヲなり。『陸德明經典釋

文』に「於字歎辭のときは、かならず音烏としるし、又『楊

氏方言』卷八に「虎或謂之於テ」とある、晉郭璞の注

に、「於音烏」と見え、『漢書』成帝紀贊の於邑の注に、

「顔師古云、於、讀如本字、又音烏」ともあり。これ彼國に

て、古くより二字異音となりしこと明か也。さては古皇國

へ傳へし音は、於烏開合兩音にわかれたるを傳習せしもの

なること論なし。故に古書どもに用ゐたるやう、判然とし

て於・烏二音輕重一も混淆せず、いと嚴かなり。されば烏帽

子をエンホウシと呼ぶるは、當時の訛音にて、その訛音たまた

ま此字の古音に近きのみなり。いかてこれを蒼頡造字のと

きの音を用ゐたるなりとはいはむ。附會の説とぞいふべき。ゆめさる説にまとはさるゝ事なかれ。

かくて又後のものながら、定家卿の『明月記』元久二年九月十九日條

「申時出二條富小路見物。今日入御後精進屋御幸。公卿

甚少。大納言公繼中納言通具宰相仲將隆衡三位公頼卿也。

御_ニ衣帽子直衣_ニ殿上人十餘人許。日入以後見物了」『同』

建永元年九月廿二日條に「今日親實卿宿所狂人等會合。醉卿稱_ニ巡事_一。

各_ニ斂_ニ本鳥之房_一行房本鳥を不定一寸之程に剪。事達_ニ天

聽_一。令_レ取_ニ衣帽子_一御覽。萬人解頤。近日只以_ニ此嘲弄_一爲

興。云々」『同』同二年正月十三日條に「午時許束帶參院。宗行昨日催_ニ姫宮_一

大相國衣帽子直衣參入。隨身殿下參會給。有_ニ入眼沙汰_一。云

々」など見えたり。此他猶多くあり。衣はエの借音にて

假字がきなり。但し此ころのものは、假字の證にはしがた

き事なれど、こはたましく古の假字づかひにあへれば、今引

出たるなり。かゝれば建仁・元久のころまでもエの假字を

用ゐてエとはかゝざりしにこそ。

(觀齋雜攷 二の二二丁)

此の他、橘 成員の『倭字古今通例全書』に「えぼ

し_一 烏帽子古書にエボシとあり。誤ならんか。」と注し、

文部省編輯寮の『語彙』には、「えぼうし えぼし

に同じ。烏帽子の音轉にて、古來エの音に稱す」_一と

『倭名抄』を引き、又『同書』えむぼうしの條に、「新

撰字鏡』『類聚名義抄』の訓を引きて、「エを用ゐる

べし。エとかくはわろし」といへり。

大槻文彦(言海)は「えぼし 字の音。エボシの

轉約。烏はエの音なれど、姑く舊慣の假名遣に従へり」

といひ、『俚言集覽』加茂季鷹(正誤かなつかひ)近藤

真琴(ことばのその) またエの假名とせり。

契沖(和字正濫要略五八) 谷川士清(倭訓栞)は、「ウ

ボシ・ヲボシともに聞よからざれば、通音にてエボシ

と云ふなり」といへり。此はオ・ヲの所屬を誤りたる

二 數田年治

えら 是は魚の頬中の骨にて、其形蠶絲

と云ふなり』といへり。此はオ・ヲの所屬を誤りたる五十音圖によりたる説なり。ヲのワ行所屬と定りたる今日よりいへば此の説は却りてエの假名遣説となるべし。

三 エボシ・エボシ

行阿の『假名文字遣』丁一五に「えぼしえぼしとも 烏帽子」

『同』丁一八に「ゑぼしえぼしとも 烏帽子」

えら (鰓)

一 エラ

一 大石千引 『言元梯』に「鰓チリ襟」と注せり。なほえり(襟)

の條参照すべし。

えら(鰓)

二 敷田年治

えら 是は魚の鰓中の骨にて、其形蠶絲具なる蠶簿エビラに似たれば、略きて鰓エラとは云り。
(音韻啓蒙下の四六丁)

狩谷望之も『箋注倭名類聚抄』卷八の三二丁 鰓の注に「今俗呼ニ衣良」といひ、

大槻文彦の『言海』物集高見の『日本大辭林』落合直文の『ことばの泉』等エの假名遣とせり。

二 エラ

『俚言集覽』愚案 ゑら 假字未考。『倭訓栞』「エ

ラ。魚にいへり。餌エの義なるべし。或は鰓をよめり」編者いふ、倭訓栞エの部に此の説見えぬ。但し、ゑらしの條に、「近世の俗語なり。魚のゑらより出たるにや。磊落の意なり」とあるを見れば、エの假名を用ひしことは明なり。

愚按、栞説餌エの義とするは、惠伊良の訓とせるなり。然れども魚の鰓もと餌エにあづからず。若亦イラ苛一字の訓義を

取ならば、イラ・エラ通ずる故に曳良の假字なり。然れども苛の義とするは非なるべし、今姑くエラの假字に收む。

寺島良安の『和漢三才圖會』活版本七 五二頁に「鯁 和名

阿木止。俗云惠良」と注せり。

えり (襟)

一 エリ

一 谷川士清

えり 領をよめり。縁領の音なるにや。物に衣くびといへり。衣領の音にや。

(倭訓栞)

『俚言集覽』に士清の説をあげ、「領をリのかなに用たる例なし」といへり。

二 義門

えりといふは、もと縁字の音にて、これは『奈

萬之奈』にいひおけるン韻の字にて、ム韻にはあらざるゆゑに、かの信をシリ篇をへり訓をクリとする類にて、エンをエリといへるならし。

(嚶々筆語第二編の三四丁)

三 大石千引

『言元梯』に「襟。縁」と注せり。

四 狩谷望之

襟亦云己呂毛乃久比。析言之則襟訓古呂毛乃久比乃毛登保志。『新撰字鏡』云、衿領衣上縁也。己呂毛乃久比乃毛止保志。是也。又按毛止保留謂廻繞也。『新撰字鏡』遺訓毛止保留。神武天皇御歌。異波臂茂等倍屢之多囊瀾能。『萬葉集』歌射往廻流。又多母等保里皆是也。物之周廻亦云毛止保利。『萬葉集』云大殿乃此母等保里能。謂殿之周回使廻繞之。云毛止保之毛止保須。神功皇后御歌本岐母登本斯是也。則知。己呂毛乃久比乃毛止保之謂衣領縁也。今俗謂衣領縁爲衣利者是也。衣利疑倍利之誤。倍利即縁也。

(箋注倭名類聚抄卷四の一七丁)

橘 成員(倭字古今通例全書) 横島昭武(合類大節

用集六下の五九丁) 加茂季鷹(正誤かな遣) 萩原廣道(心の

種) 文部省編輯寮(語彙) 近藤真琴(ことばのその)

大槻文彦(言海) 物集高見(日本大辭林) 落合直文

(詞の泉)等いづれもエの假名とせり。但し『言海』

に『衣輪の音と云』とあるは何れの書に見えたる説

なるか。未だ見出でず。

喜多村信節の『嬉遊笑覽』存探叢書本第三冊の八五丁に「りんとい

ひしものは『下學集』に「輪、日本俗謂衣領裏曰輪也」

林逸が『節用集』に「輪衣之」とあり。後にはそぎ

えりといひ、今は半領といふ。寛永以前の書には、小

袖にもはをりにも、これをかけたるが多し。但しりん

は襟のみに限るべからず。覆輪の義にて、袖へり・裾の

ふさなど皆輪なり。『平家物語』に、重盛公のさしぬき

のりに蛇のまとひし事をいへり。『筵響録』に「指

貫の裏の表へすこしなめりたる處をいふ歟」と。表

の袴の輪といふは、赤き裏の、すこしすそへおめりたる

處を輪といひたる事、『寒驢嘶餘』にみえたり。又小

袖のりんといふは、小袖のうちのすそに、さまざまの

さぬにて、裾縫といふ物を、風流にしたるを輪といふと

『宗吾が記』に出たり」とあり。参考のため附記せ

り。

二 エリ

一 貝原篤信

襟エリ 縁也。衣のへり也。へとエと通ず。

(日本釋名三の二四丁)

二 黒川春村

衣の襟の假字を、後世えりとのみかくは、

え字を俗に、ころもえといへば、なまじひに推當たるにても

あるべし。されどこはおぼつかなき事なり。按ふに、恐ら

くはエの假字なるべし。其由、委曲には後にいふを見るべし。
編者いふ、本書を検するに所見なし。

(碩鼠漫筆一八三頁)

三 未定

『和字正濫鈔』四の一丁に「領 えり、假名未考」とあり。又『俚言集覽』に「えり 常に此エの字を用う。未考」と見え、岡本保孝も『古言梯補遺』に「えり領 假字未詳」といへり。

えり(𩺰)

一 エリ

谷川士清 𩺰 簾をよめり。魚を捕の具也。魚箔

も同じ。餌ニに入ニの義なるべし。𩺰と書は俗字也

(倭訓栞)

寺島良安(和漢三才圖會活本四三六頁)

大槻文彦(言海)

物集高見(日本大辭林)等またエの假名遣とせり。

宗碩の『藻鹽草』一六の四七丁に「𩺰

江に垣をしまは

して、魚を入れてとる也」とあるは、江入の義とせるに

はあらざるか。さらば𩺰とあれどエの假名遣説なる

べし。

二 エリ・エリ

落合直文の『ことばの泉』にはエリ・エリの兩條にいだせり。

三 未定

契沖の『和字正濫鈔』四の一丁に「えり 假名未考」また